

日中の比較からみる「学校教育」の捉え方と 「社会で学ぶ」意義について —— 日中の中・高生に対するアンケート調査結果より ——

A Comparative Study of Japanese and Chinese Culture on the
"Learning in School" and "Learning out of School" Questionnaire
Surveys to the Middle and High School Students in Japan and China

川村 潤子
Junko KAWAMURA

要 旨

本論は、浙江省海寧市の友誼学校に通学する農民工の子どもたちと、筆者が非常勤講師として勤務する私立学校の高校生を対象とし、勉強、友人に關しての考え方、携帯電話の使用時間・休日の過ごし方、将来・希望に關しての考え方、起業に關しての考え方などの違いをアンケート調査に基づき明らかとした。そして、両国の比較を通して、「学校教育」または「社会で学ぶ意義」についての分析を試みた。とくに、将来に希望（「商売を始めたい」という希望）を抱くことができるかどうかには、大きな違いがみられた。その背景として、「学校教育」に限らず、社会で学ぶ機会や環境の違いが大きく影響していることを明らかとした。

キーワード：農民工，農民工子弟学校，教育困難校，起業

はじめに

本論は、2017年8月に、浙江省海寧市の友誼学校¹において農民工の子どもたちを対象に実施

1 友誼学校については、拙稿「民工子弟学校・友誼学校の歴史・存在意義 公立学校の門戸が開かれる中で、なぜ農民工たちは今でも民工子弟学校に通うのか」(『ICCS 現代中国学ジャーナル』第12巻第2号2019年12月発行予定・国際中国学研究センター)や、汪希望(2012)『中国民工学校外史 現役校長が語る民工学校の過去・現在・未来』(『現代と文化』(監修原田忠直，生江明，第125号，日本福祉大学福祉社会開発研究所)に詳しい。

したアンケート調査、および、筆者が非常勤講師として勤務する岐阜県の私立学校の高校生を対象としたアンケート調査の結果に基づき、勉強に関しての考え方、友人に関しての考え方、携帯電話の使用時間・休日の過ごし方、将来・希望に関しての考え方、起業に関しての考え方などの違いを明らかにしつつ、農民工の子どもたちにとっての「学校教育」または「社会で学ぶ意義」についての分析を進める。

もっとも、中国での対象者は小学校6年生から中学校3年生の生徒たちであるのに対し、日本での対象者は高校生1年生から高校生3年生の生徒たちである。このように対象者の年齢・学年は大きく異なる。しかし、この二つの学校には共通点がある。それは、両校ともに、それぞれの地域のなかで学力レベルが最底辺を形成しているという点である。友誼学校は海寧市が毎年実施する実力テストでは最下位を争う常連校であり、日本の高校は「教育困難校」といわれている。いずれも「低学力」であり、卒業後は進学せず、そのまま就業するケースは少なくない。さらに、就業先ではそれほど高い賃金も望めず、「低賃金予備軍」といわれることもしばしばである。このような理由から、初期条件は異なるが、比較検討することは可能であると考えた。

筆者の問題意識、本論の目的とは次の通りである。

そもそも筆者は、農民工研究を進める上で、一つの確信がある。それは、先行研究では、農民工やその子どもたちのすべてを描き切れていないという確信である²。言い換えれば、先行研究では、彼らのことを「社会的弱者」、「貧困層」、「低学歴」、「3K労働者」などかなりネガティブに捉えられることは多いが、そのような形容と筆者が知る彼らの実態との間に大きなギャップを感じるからである。このギャップを埋めることは筆者の大きな問題意識であり、研究テーマにほかならない。無論、本論においてこのギャップのすべてを埋めることはできない。本論では、主に、「学校教育」に焦点を当て分析を進めたい。「学校教育」について考察することが、ギャップを埋めるための一つのパーツになると考えたのは、友誼学校において子どもたちにヒアリングを行っていた時、彼らの答えに衝撃を受けたからである。

2017年3月、卒業を数か月後に控えた中学校3年生・40人に、卒業後、進学するのか、就職するのか、あるいは徒弟になるのか、その進路について質問すると、40人全員が「決めていな

2 これまでの研究における農民工の代表的な捉え方としては次のようなものがある。新保は、「「同等の資格と機会」を今の中国で保障することができるのだろうか。不平等な戸籍制度が存在し、国民それぞれが受ける社会保障や教育の格差は拡大し続けている」（新保・阿古。2016. p.174）と戸籍制度によって生じる教育格差の問題を指摘する。さらに、「大学に進学できるかは、都市戸籍を得ることができるか、農村戸籍のままに一生を終えるかという運命の分岐点である」とまで断言する（新保・阿古。2016. p.42）。このように阿古と新保は、社会保障や教育の機会の不平等が大きな社会問題であるとするが、都市戸籍はそれほど優れたものであるのか。果たして農民工はそこまで不平等感を抱いているのだろうか。もちろん、彼らは、教育の機会を与えられるならば受けるだろう。しかし、自分には勉強が向いていないと思ったら、「商売」を始めるなどの違う道を歩むことになるであろうし、その道が、何故、貧困への道であると決めつけることができるのか。また、厳善平は、「彼らの絶対多数は半ば都市住民であり、戸籍の転出入が許されるなら、故郷に帰ろうとは思わないだろう。すでに挙家離村している人たちはそういう思いをいっそう強く持っているに違いない。ところが、前述の低賃金に加えて、現住地の戸籍を持たない農民工は全体として実に惨めな生活状況に追い込まれている」（厳善平。2009a. p.116）と農民工を捉えている。

い」という答えが返ってきた。「卒業を目の前にして、日本の学校ではありえないのですが、進路指導は行わないのですか」と校長に聞くと、「家族から進路指導に対する要求はありませんし、今後、日本のような三者懇談みたいなものやってくれといわれても、やらないと思います。まず、そのような要求はないと思いますが、いずれにせよ、進路は自分で決めるものでしょう」とあっさりとした答えが返ってきた。なるほど校長の話しには一理あると思うとともに、農民工にとっての学校、または教育の受け止め方は、筆者がこれまで学校教育に抱いていたものの外側に存在しているのではないかという考えが浮かんだ。もちろん、もしも 40 名の子どもたちが、卒業後、所詮、自分は農民工の子どもだから、低賃金で 3K 労働者として働いていくしかない、投げやりな態度で「決めていない」と答えていたならば、それは、先行研究で登場する農民工の姿と一致したことであろう。ところが、彼らの言葉に惨めさや諦めを感じ取ることができないばかりか、「将来は何になりたいか」と尋ねると、子どもたちの多くは「経営者になりたい」と目を輝かせるのだ。数か月先に迫った選択については何も決めていないが、もう少し先の人生に大きな希望を抱くことはできるのである。なぜなのか。なぜ、高い学力を有しているとはいえず、卒業後、3K 労働の現場で働くことになる可能性が高いにも関わらず、彼らは、諦めることなく、希望を抱けるのだろうか。

本論では、「教育困難校」というレッテルを張られた高校で、学校のレベルがそのまま、生徒たちのその後の人生を大きく規定する傾向が強くみられる高校において、半ばあきらめの心境で日々を過ごす生徒たちの意識と比較しながら、農民工の子どもたちにとっての学校教育とはなにか、そして、学校教育では収まりきらない「社会で学ぶ」意義についての分析を試みたい。

第 1 章 調査対象者の基本的特徴と「勉強」についての考え方

第 1 節 基本的特徴

中国においてアンケート調査に協力してくれたのは、友誼学校に通う小学校 6 年生から中学校 3 年生までの計 392 名である。学年別にみれば、小学校 6 年生が 122 名 (31.1%)、中学校 1 年生が 137 名 (34.9%)、中学校 2 年生が 95 名 (24.2%)、中学校 3 年生が 38 名 (9.7%) である。中学校 3 年生が少ないのは、中学校 2 年生から中学校 3 年生に進級するとき、故郷の高校等に進学を考えている子どもたちが友誼学校をやめていくからである³。

男女構成をみると、男子生徒が 211 名 (53.8%)、女子生徒が 180 名 (45.9%)、不明が 1 名 (0.3%) である⁴。また、兄弟数をみると、「一人っ子」が 42 名 (10.7%)、「二人兄弟」が 163 名

3 このような傾向はとりわけ友誼学校だけではなく、少なくとも海寧市にある別の民工学校でも、中学校 3 年生になるとクラス数が減っていった。

4 男子生徒が多くを占めている理由は、女性蔑視の風習にもよるところが全くないとは言えないが（友誼学校の校長の話によれば、彼らが学校経営を始めた 1995 年頃は、女子生徒たちが学校の周辺で学校に入れない、または途中で家庭の都合で退学をさせられるケースは少なくなかったという）、それ以上に男子を欲しがる風習の影響によるところが大きいのではないかと考えられる。

(41.6%)、「三人兄弟」が108名(27.6%)、「四人兄弟以上」が76名(19.4%)、「無回答」が3名(0.8%)であった。友誼学校に通う子どもたちの多くはたくさんの兄弟があり、このような傾向はとくに近年顕著に現れている⁵。

次に、日本のアンケート調査の基本的な特徴は次の通りである。

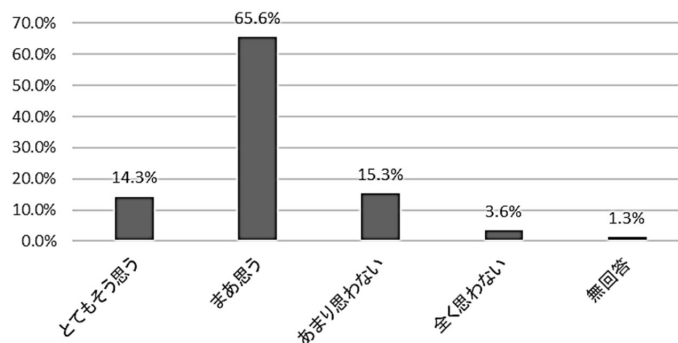
学年をみると、高校1年生276名(30.2%)、高校2年生307名(33.6%)、高校3年生330名(36.1%)の計913名である。男女構成をみると、男性541名(59.4%)、女性370名(40.5%)、不明1名(0.1%)であるため、友誼学校の子どもたちの男女比率とほとんど同じ比率となっている。また、兄弟数をみると、「一人っ子」は92名(10.1%)、「二人兄弟」が469名(51.4%)、「三人兄弟」が231名(25.3%)、「四人兄弟以上」が117名(12.8%)、「不明」が4名(0.4%)となっている。兄弟数をみるかぎり、友誼学校の子どもたちと同じような傾向が示されている。もちろん、これは単なる偶然であるが、少子化が進むといわれている日本では、比較的兄弟数が多いという印象を受ける。以上が日本の高校生の基本的特徴である。

第2節 農民工子弟にとっての「勉強」と「進路」

農民工の子どもたちの「勉強が得意であるか」、「希望する最終学歴」などについての考え方をみると、次のような点が指摘できる。

第1に、「あなたは勉強が得意ですか」という問いをみると(グラフ1-1参照)、「とても思う」は56名(14.3%)、「まあ思う」は257名(65.6%)、「あまり思わない」は60名(15.3%)、「全く思わない」は14名(3.6%)、「無回答」が5名(1.3%)であった。比較的多くの人々が勉強を得意と考えている。しかし、ここで留意すべき点は、上述したように、友誼学校は毎年海寧市における共通テストでは毎回最下位をとっている学校であるということだ。そのような事実を前に

グラフ1-1 勉強が得意な方ですか

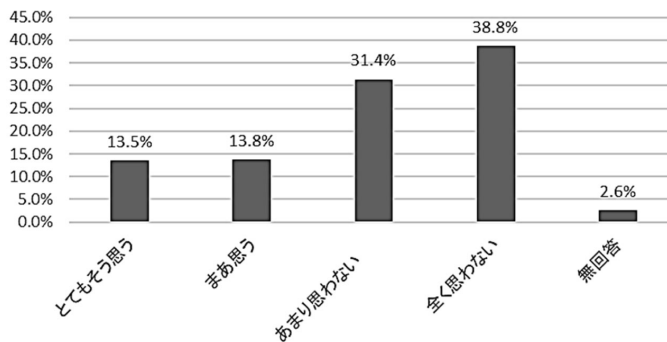


5 友誼学校で学ぶ子どもたちの大きな特徴として、兄弟数の多さを指摘することができる。兄弟がたくさんいれば、進学や将来像、社会の捉え方に違いがみられるのではないかと考えられよう。なお、この兄弟数の視点から中国社会の捉え方として、註の6、11、12、14、15で分析を試みる。

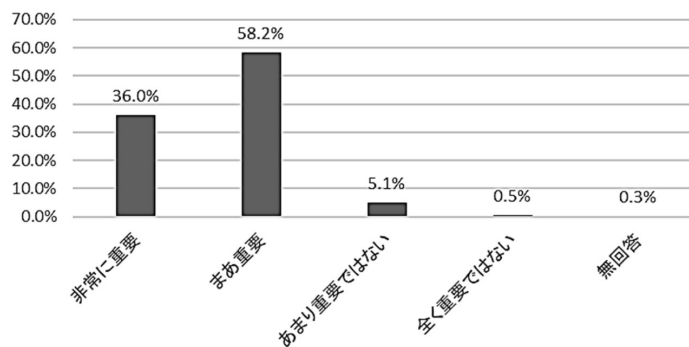
しても彼らは、自分は勉強が得意だと考えている背景には何があるのでしょうか。「井の中の蛙」といってしまえばそれまでであるが、少なくとも彼らは、「勉強ができない」という劣等感を強くいだいているわけではない。

第2に、「あまり勉強をしなくても将来は困らない」という問いの回答をみると（グラフ1-2参照）、「とても思う（勉強しなくても将来は困らない）」は53名（13.5%）、「まあ思う（勉強しなくても将来はあまり困らない）」は54名（13.8%）、「あまり思わない（勉強しなくては将来困るかもしれない）」は23名（31.4%）、「全く思わない（勉強しなくては将来困る）」は152名（38.8%）、「無回答」が10名（2.6%）であった。また、同じような問いである「勉強は重要だと思いますか」という問いに対しては（グラフ1-3参照）、「非常に重要」は141名（36.0%）、「まあ重要」は228名（58.2%）、「あまり重要ではない」は20名（5.1%）、「全く重要ではない」は2名（0.5%）、「無回答」が1名（0.3%）であった。この2つの問いから明らかなように、彼らは勉強が重要であり、勉強ができないと将来困ることになるという認識をもっている。もっとも繰り返しになるが、勉強に対しては高い関心を寄せているが、上述したように、海寧市の共通テストでは最下位であり、必ずしも結果はともなっているわけではないが、決して勉強をないがしろにしているわけではなく、前向きな姿勢をみてとることができる。

グラフ1-2 あまり勉強をしなくても将来は困らない

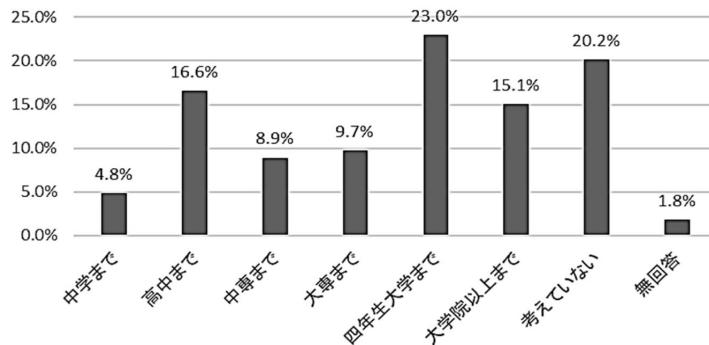


グラフ1-3 勉強は重要だと思いますか



第3に、「将来どの程度の教育を受けたいか」をみると（グラフ1-4参照）、「中学まで」が19名（4.8%）、「高校まで」が65名（16.6%）、「中専（中学卒業者が通う専門学校）まで」が35名（8.9%）、「大専（高校卒業者が通う専門学校）まで」が38名（9.7%）、「四年生大学まで」が90名（23.0%）、「大学院以上」が59名（15.1%）、「考えていない」が79名（20.2%）、「無回答」が7名（1.8%）であった⁶。小学校6年生の子どもたちやまだ進路を目の前に控えていない人が多いためか、「まだ考えていない」と答える割合が高くなっているが、「四年生大学以上」を希望している人たちが4割弱もいる。ただし、友誼学校の校長や教師たちの話によれば、実際に卒業生で「四年生大学以上」に進学したケースは稀であるという。つまり、ここで示されている高学歴希望はあまり現実的ではなく、卒業生の多くは、「中専卒または高校卒」へと収斂されるケースが大変を占める。しかし、上述したように勉強に対しては、多くの子どもたちは非常に前向きな姿勢でもある。「勉強が得意だ」や「勉強は重要だ」という前向きな姿勢をみると、つつい子どもたちは、「大学に進学することを目的としている」、「大学に進学したい」と思い込んでしまうが、そのような視点から子どもたちを捉えることはできないかもしれない。つまり、彼

グラフ1-4 将来どの程度の教育を受けたいか

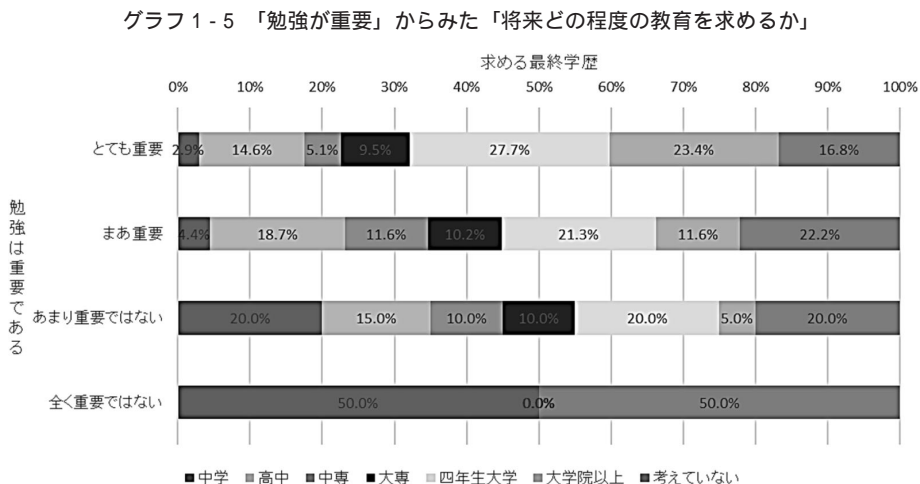


6 「将来求める教育レベル」をみると、「中学まで」と考えている人は「一人っ子」では誰もいない。「二人兄弟」、「三人兄弟」、「四人兄弟以上」においても5.6%、5.7%、5.3%と少ない。「高校まで」はすべての兄弟数で2割弱となっている。「中専まで」と「大専まで」と考えているのは、「三人兄弟」は11.4%と他の兄弟より少し低くなっているが、その他の兄弟数は2割前後となっている。「四年生大学」、「大学院以上」と考えているのは、「一人っ子」から順に、34.2%、35.4%、47.7%、37.4%となっており、「三人兄弟」が最も高い割合を示し、次に「四人兄弟以上」、「二人兄弟」、「一人っ子」という順になっている。また、「考えていない」は、他の兄弟数と比べても「一人っ子」が最も多く、31.6%と高くなっている。このことから、兄弟数によって将来求める教育レベルに大きな差がないことが窺える。兄弟数が多ければ多いほど進路を諦めるケースが生まれるかと思われたが、そのような結果にはなっていない。兄弟数が多くても、彼らは生活の中で我慢することがないとも考えることができるであろう。それはおそらく、兄弟の中の年長者がすでに働きに出ているケースがあり、また、働いた給料を家に収めていたりするケースがあるのではないかと推測できる。実際、2017年8月に行ったヒアリング調査で、兄弟がすでに働いているという話を何人かから耳にしているためである。そのためすでに親の手から離れており、兄弟が多くても教育費をかけることが十分可能な状況があるのではないかと推測できる。

らが「勉強は得意」だと言い切る背景には、学歴で得られるものではなく、社会で学び取る力、その中には友人・知人から学び取れることや手に職をつけるという能力のことも指しているのではないだろうか。実際、2017年3月に実施した40名の子どもたちに対するヒアリング調査⁷では、「社会で学びたい」と答える子どもたちがいた。また進路として「徒弟」と答える子どももいた。彼らにとって「勉強する」ことは必ずしも学校教育だけを念頭に入れているわけではないという回答を得ることができた。

第4に、「勉強が重要」だと考えている人が「将来どの程度の教育レベルを求めているか」をみると（グラフ1-5参照）、四年制大学以上の学歴を求める割合は、「勉強はとても重要」だと考えている人は27.7%、「勉強はまあ重要」が21.3%と高くなっている。また、「勉強は全く重要ではない」と考えている人は、最終学歴を「中学」、「考えていない」と答えており、割合はそれぞれ50%と高くなっている。しかし、「勉強がとても重要」「まあ重要」と答えている人たちの中でも、「中学」から「大専」に行きたいと答えている人はそれぞれ、32.1%、44.9%いる。このことから、「勉強は重要」だと思っていなくても、3割から4割はそれほど高い学歴を求めている。ここにも、上述したように勉強は学校だけで学ぶものではないという捉え方が隠れているのではないだろうか⁸。

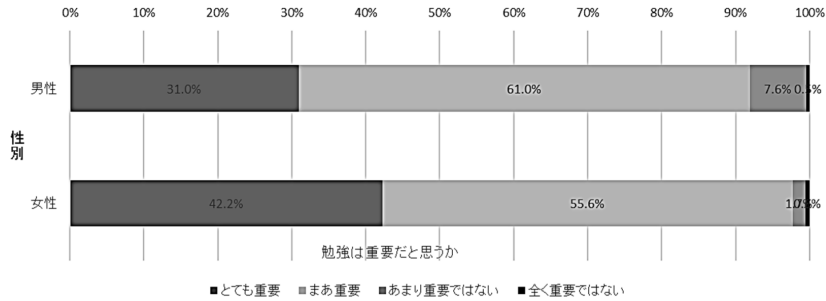
第5に、性別からみた勉強の重要性をみると（グラフ1-6参照）、女性の方が「勉強は非常に重要」（42.2%）だと考えていることがわかる。また、学歴に関しても（グラフ1-7参照）、女



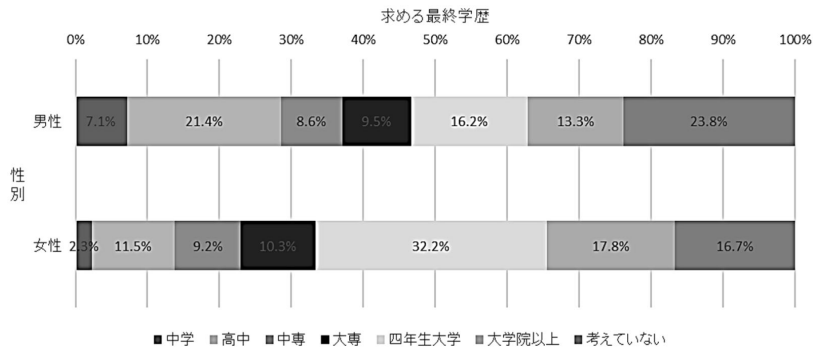
7 2017年3月に浙江省海寧市の友誼学校で調査をしたものである。詳細は別稿にて紹介する予定である。

8 実際に、2017年8月に行った追跡調査では40名中5名が故郷の高校へ進学し、25名が海寧市の技術学校に進学、4名が徒弟、6名が就職という進路を選択していた。このような現実と「学歴」に関するアンケート結果を合わせて考えれば、希望とは異なり、望んでいない結果になっていると捉えることができる。しかし、彼ら40名の大多数は、2017年3月の面接調査では「将来は商売をしたい」と考えている人が多かった。そのため、「学歴」は一つ的手段と捉え、社会での「勉強」を選択したのではないのだろうか。

グラフ 1-6 「性別」からみた「勉強の重要性」



グラフ 1-7 「性別」からみた「どの程度の教育を受けたいか」



性の方が「四年生大学以上」を求めている割合が50.0%と、より高学歴を求めている。また、男性も勉強が「とても重要」「まあ重要」が92.0%と勉強は重要だと考えてはいるものの、求める最終学歴に関しては「考えていない」という答えが23.8%と最も多くなっており、現実的にまだ考えていない人が多いことがみてとれる。男性と比べて女性の方が高学歴を求めている背景には、一つは親による女性蔑視の風習が薄くなり、親が男性と同等な教育を与えるようになったのであろう。また、親たちの所得の向上も挙げられるのではないだろうかと推測できよう。

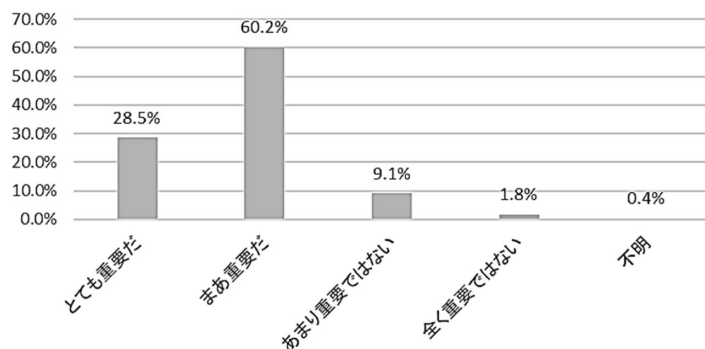
第3節 日本の高校生の「進路」についての考え方

次に日本における、勉強に関する問題についてみていきたい。

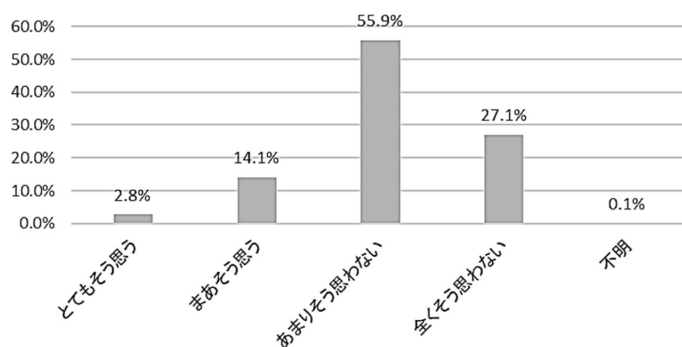
第1に、「勉強が重要だと思いますか」をみると（グラフ1-8参照）、「とても重要だ」が260名（28.5%）、「まあ重要だ」が550名（60.2%）と9割弱の人が、「勉強は重要だ」と答えている。この点では、日本と中国で大きな差はなく、両国ともに「勉強は重要だ」と考えている回答者が多い。

第2に、これは両国で大きく違うところであるが、「あなたは勉強が得意な方だと思いますか」をみると（グラフ1-9参照）、「とても思う」が26名（2.8%）、「まあ思う」が129名（14.1%）、「あまり思わない」は510名（55.9%）、「全く思わない」が247名（27.1%）、「不明」が1名

グラフ 1-8 勉強が重要だと思うか



グラフ 1-9 勉強が得意な方だと思うか



(0.1%) となっていて、勉強に対して苦手意識をもっているようだ。中国と比較をしても非常にネガティブな結果となっている。実際、筆者が高校で授業をしていますが、彼らの口からは、「俺らには無理だよ」というような投げやりな声をよく聞く。しかし、彼らが言うほど勉強に関する能力が低いということはないのだが、高校入学までのどこかですでに苦手意識は育まれ、半ば諦めているような状態になっているようでもある。もちろん、生徒のなかには小学生、中学生の内容が理解できていないケースもある⁹。小学校、中学校時代のどこかで不登校になったのか、

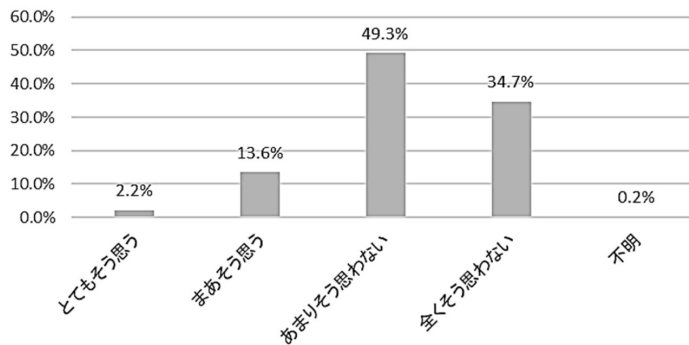
9 公民の授業で、「晩婚化」と黒板に書き、生徒に問うたところ、「こんばんは」、「夜に結婚をすること」「夜にプロポーズをすること」という答えがふざけているわけではなく、真剣に返ってくる。また、「4×7」が「21」と答えたりする生徒や、鏡文字（例えば「ヨーロッパ」が「E-ロッパ」に見える回答を定期テスト等でみかける）、カタカナの「ツ」と「シ」、「ソ」と「ン」の違いが分からない生徒がいたりする。他にも、黒板に書いてあることを自身のノートに同じように書き写せない生徒や、50分間座り続けられない生徒も中にはいる。しかし、彼らは人との距離を縮めることがとても上手く、人懐っこいのだが、学歴・学力で人を判断する傾向が強い日本社会では、彼らを受け入れ、彼らの能力が生かされる場所は決して多くはないだろう。なお、筆者が感じる日本の教育現場の諸問題については、生江明、川村潤子、原田忠直【鼎談】続鼎談「蜷川幸雄のメモから読み解く現代社会 仮面とお面の間に存在するもの」（『日本福祉大学経済論集』第57号 pp.137-168, 2018 日本福祉大学経済学会）を参照して欲しい。

教師に捨て置かれてしまったのかその理由は定かではないが、苦手意識を払しょくさせ、再生することが難しい日本の学校環境のどこかに問題があることは間違いないであろう。

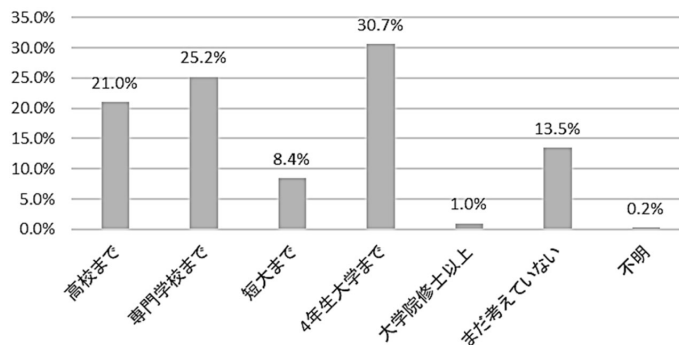
第3に、「勉強しなくても将来は困らない」をみると（グラフ1-10参照）、「とても思う（勉強しなくても将来は困らない）」が少なく、20名（2.2%）、「まあ思う（勉強しなくても将来はあまり困らない）」が124名（13.6%）、「あまり思わない（勉強しなくては将来困るかもしれない）」は450名（49.3%）、「全く思わない（勉強しなくては将来困る）」は317名（34.7%）、「不明」が2名（0.2%）という結果となっている。両国を比べると、比較的中国の方が「困らない」と答えている人が多い。中国では3割弱の人が困らないであろうと答えているが、日本では1割強となっている。それは、友誼学校の子どもたちが卒業後の進路の選択として「徒弟」があることと関係しているのではないだろうか。少なくとも現在の日本ではなかなか「徒弟」になるような話を聞くことはない。また、日本では、自営業者が減少していることもあり、親や大人たちをみていると、企業に就職をすることしか描けないのではないだろうか。そして、そうした企業就職において重要な物差しは「勉強」や「学歴」だと、日本の高校生たちは肌身で感じているため「勉強をしなくては将来困る」と答えているのだろう。

第4に、「将来どの程度教育を受けたいか」をみると（グラフ1-11参照）、「四年生大学まで」

グラフ1-10 勉強しなくても将来は困らない



グラフ1-11 将来どの程度教育を受けたいか



が280名(30.7%)、「大学院以上」が9名(1.0%)となっている。「短大まで」は中国と大きな差がないが、「四年生大学」を求める割合が日本は若干中国より高く、「大学院以上」を希望している人は中国より少ないことが分かる。「勉強は重要だ」、「勉強をしなくては将来困る」と答えていた日本の高校生が、「四年生大学まで」を3割しか希望していないのは、本当に勉強が重要だと考えているのかと疑問に思えてならない。学校での勉強を社会に出て必要に思えていないのか、学費が高いためなのか、その理由は多々あると考えられるが、こうしたやや矛盾するような回答を寄せることしかできない点に日本の「教育困難校」の問題点が潜んでいるといえよう。

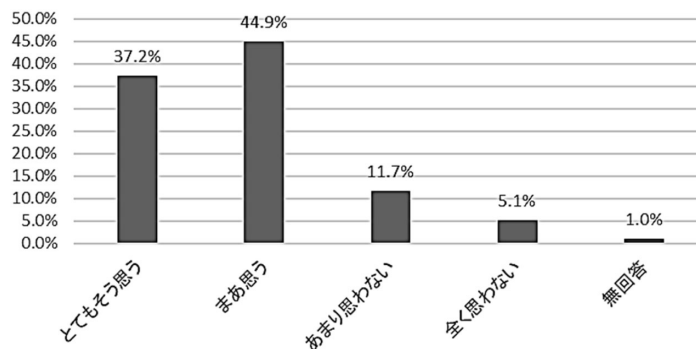
第2章 「友人」に対する意識構造

農民工の子どもたちが、友人に関してどのように考えているかを「友人の数」、「悩みを打ち明けられる友人の数」などについてみると、次のような点が指摘できる。

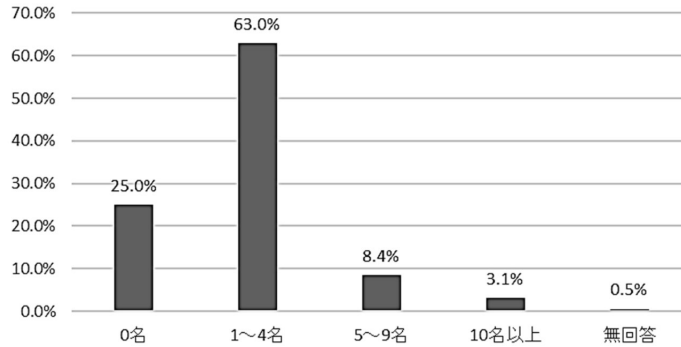
第1に、「あなたは友人がたくさんいると思いますか」をみると(グラフ2-1参照)、「とても思う」は146名(37.2%)、「まあ思う」は176名(44.9%)、「あまり思わない」は46名(11.7%)、「全く思わない」は20名(5.1%)、「無回答」が4名(1.0%)であった。8割強は友人がたくさんいると回答を寄せている。

第2に、「あなたは悩みを打ち明けられる友人が何人いますか」をみると(グラフ2-2参照)、「1名もいない」が98名(25.0%)、「1~4名いる」が247名(63.0%)、「5~9名いる」が33名(8.4%)、「10名以上いる」が12名(3.1%)、「無回答」が2名(0.5%)という結果となった。悩みは基本的に一人で解決するという子どもが多いこと、または相談をするにしても少人数の友人にするという様子が窺える。ただし、上述したように友人は多いのだが、誰もが相談相手になるというわけではないようだ。また、「あなたが友人に求める最も重要だと思うことは何ですか」という問をみると(グラフ2-3参照)、友人に求めるものとして最も多かったものは、「思いやりがあること」が127名(32.4%)であった。次に多かったのは「約束を守る」が77名(19.6%)と「同じ趣味を持っていること」が71名(18.1%)、「要求なし」が47名(12.0%)、

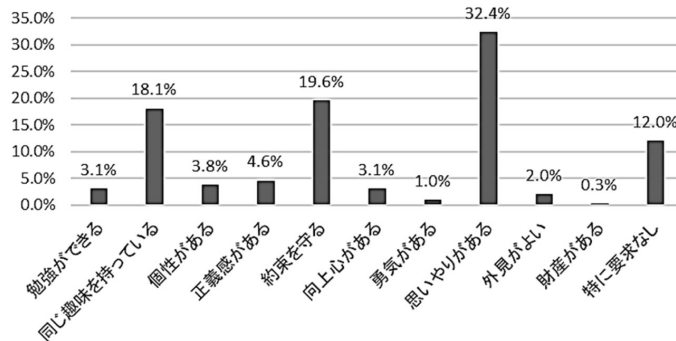
グラフ2-1 友人がたくさんいると思うか



グラフ 2-2 悩みを打ち明けられる友人は何人いるか



グラフ 2-3 友人に求める最も重要だと思うことは何か



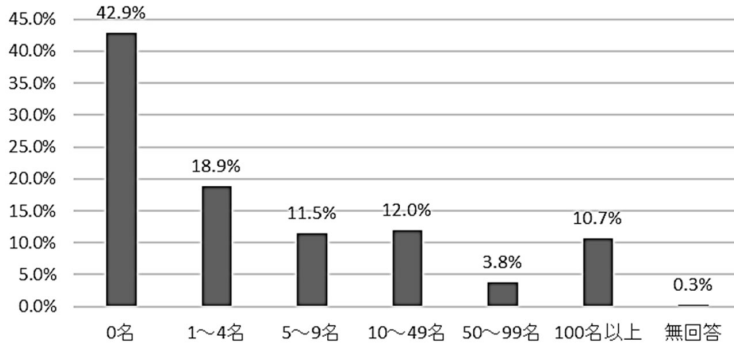
「正義感がある」18名（4.6%）, 「個性がある」15名（3.8%）, 「勉強ができる」12名（3.1%）, 「向上心がある」12名（3.1%）, 「外見がよいこと」8名（2.0%）, 「勇気がある」4名（1.0%）, 「財産がある」1名（0.3%）という結果となっていた。このように「思いやりがあること」や「約束を守る」が多いことから、何かあったときに手を差し伸べてくれることを求めることもあるだろうが、とりわけ友人の定義に偏りはなく、基本的には、それほど友人に依存しているわけではないようだ。

第3に、「あなたはインターネット上だけ（SNSを含む）の付き合いで、実際には会ったことがない友人は何人いますか」という問いをみると（グラフ2-4参照）, 「0名」が168名（42.9%）, 「1~4名」が74名（18.9%）, 「5~9名」が45名（11.5%）, 「10~49名」が47名（12.0%）, 「50~99名」が15名（3.8%）, 「100名以上」が42名（10.7%）, 「無回答」が1名（0.3%）であった。多くの人がネット上の友人はいないと答えているが、若干数の人がネット上の友人がいると答えている。このような結果から、彼らが捉える友人とは、後述する日本の高校生と比べ決してバーチャルなものではなく、リアルなものであるといえよう。

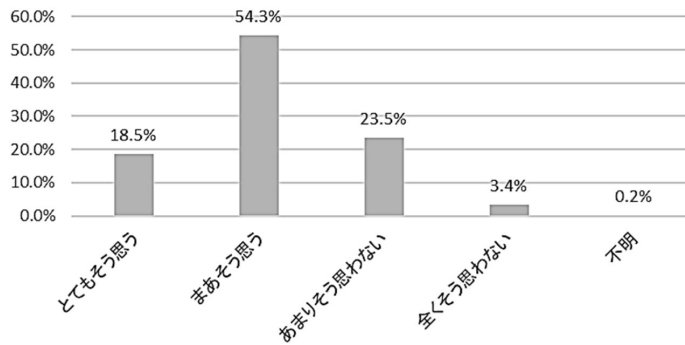
次に日本の友人に関しての結果をみると、次のような点が指摘できる。

第1に、「友人はたくさんいますか」をみると（グラフ2-5参照）, 「とても思う」が169名

グラフ 2-4 インターネット上だけの付き合いで、実際には会ったことがない友人は何人いるか



グラフ 2-5 友人はたくさんいるか

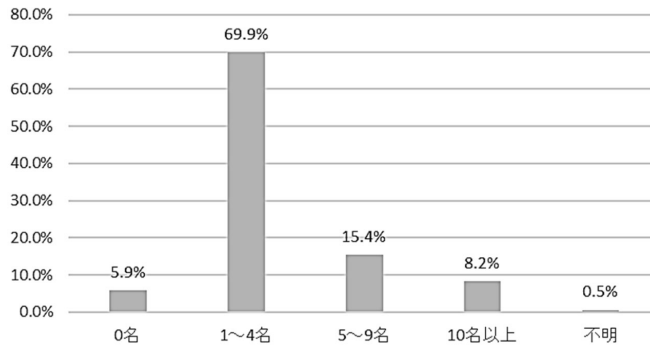


(18.5%), 「まあ思う」が496名(54.3%), 「あまり思わない」が215名(23.5%), 「全く思わない」が31名(3.4%), 「不明」が2名(0.2%)と、中国と比較すると「友人がいない」と考えている回答者が目立つ。

第2に、中国では「悩みを相談する友人はいない」、もしくは「1~4名」という回答者が多くみられたが、日本では、逆に「悩みを打ち明けられる人がいない」と答えたのは54名(5.9%)であり(グラフ2-6参照)、「1~4名」が638名(69.9%), 「5~9名」が141名(15.4%), 「10名以上」が75名(8.2%), 「不明」が5名(0.5%)となっており、悩みを打ち明ける人数が中国よりも多くなっている。しかし、筆者はこのような回答の背後に豊かな人間関係が形成されているとは思えない。とくに、中国で中学生に対してヒアリングを行っている、彼らははっきりと自己主張し、筆者の質問、とくに答えにくい無理難題にも自分なりの考え方をみつけ出そうする姿に大きな違いを見出す。

たとえば、自己主張の強さの違いとして、ルールに関する問いかけが参考になろう。まず、中国の子どもたちに、「あなたはきまりやルールをきちんと守るほうですか」と問うと、「とても思う」は104名(26.5%), 「まあ思う」は244名(62.2%), 「あまり思わない」は32名(8.2%), 「全く思わない」は5名(1.3%), 「無回答」が7名(1.8%)となっている。この結果をみる限

グラフ 2 - 6 悩みを打ち明けられる友人は何名いるか

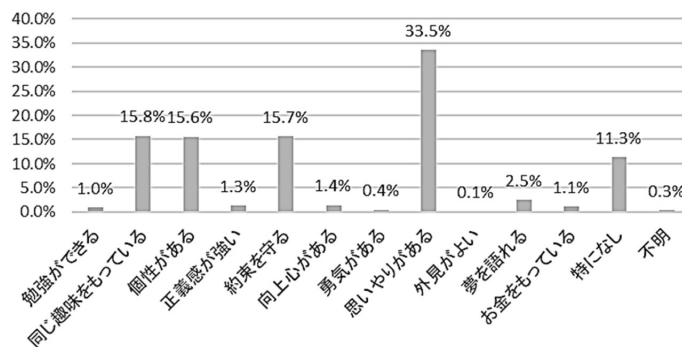


り、しっかり決まりやルールを守る姿が浮かび上がるが、ヒアリング調査をした時の彼らの答えには違う印象を受ける。ヒアリング調査時に彼らは校長先生を前にして、「学校のきまりやルールなんてどうでもよい」と言い切っていた。この話を聞いた校長は、怒るところか笑顔で、「このような生徒を育てたい」と答えていた。おそらく、彼らの過ごし方や話を聞いている中での推測であるが、他者から与えられるルールに関してはどうでもよいと思っており、自分たちでつくったルールに関しては守ると考えているようである。

次に、日本で教壇に立っていると、人間関係は形成しづらく、その上希薄化しているように感じるものがしばしばある。たとえば、高校生たちに「ルールは〇〇だ」と言われたら、〇〇に何をいれる？」と質問をすると、「守る」、「大事」、「絶対」というような答えが返ってくる（ちなみに中国で同じ質問をすると、「破る」、「自分でつくるもの」といった答えが返ってくる）。つまり、自己主張もままならないのに、他人に相談をすることができるのだろうか。それゆえ、日本の高校生が、悩みを打ち明けられる人がたくさんいると回答しているが、それは愚痴を聞いてくれる程度の相手に過ぎないのかもしれないと思わざるを得ない。

第3に、「あなたが友人に最も重要だと思うものは何ですか」をみると（グラフ 2 - 7 参照）、全体的な傾向としては上でみた中国の回答とそれほど大きな違いはないが、「個性があること」

グラフ 2 - 7 友人に最も重要だと思うものは何か



を選択するという点に違いがみられた。日本では、142名（15.6%）が友人には「個性を求める」という結果となったが、中国では15名（3.8%）しか「個性」を求めているいない。

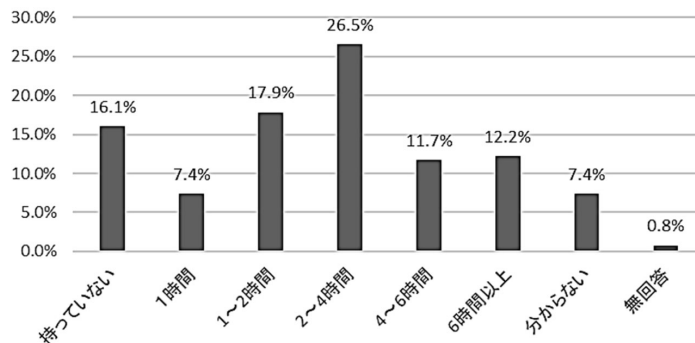
ただし、日本の高校生と日々接していて、決められた制服、髪型、荷物であることを従順に守る彼らが求める「個性」とは一体何を意味しているのか理解に苦しむというのが実感である。少なくとも日本はどこか人と外れた生き方をすると目立ち、それを応援してくれるような環境というのはなかなかないし、筆者自身、友人や知人から「個性」を求められているという実感は皆無でもある¹⁰。それゆえ、「個性」という回答とは、ないものねだり、またはあこがれ程度の内容ではないかと思われる。逆に、中国で「個性」を求めないのは、個性的であること、その個性を認めることは当たり前のことであるためではないかと思われる。ただし、両者の生活状況のなかでは、「携帯電話の使用時間」や「休日の過ごし方」などでいくつかの共通点を見出すこともできる。

まず、中国の子どもたちの「一日の携帯電話の使用時間」をみると（グラフ2-8参照）、「持っていない」が63名（16.1%）、「1時間程度」が29名（7.4%）、「1～2時間程度」が70名（17.9%）、「2～4時間程度」が104名（26.5%）、「4～6時間程度」が46名（11.7%）、「6時間以上」が48名（12.2%）、「ほとんど使わない」が29名（7.4%）、「無回答」が3名（0.8%）であった。使用時間にはバラつきがみられるが、それでも使用時間は決して短いとはいえない。

次に、「休日の過ごし方」をみると（グラフ2-9参照）、「家ででのんびり過ごす」が最も多く235名（59.9%）、「友人と出かける」が108名（27.6%）、「家族で出かける」が49名（12.5%）となっている。半数以上は「家で過ごす」と回答しており、上でみた携帯電話の使用時間が影響しているのではないかと推測される。

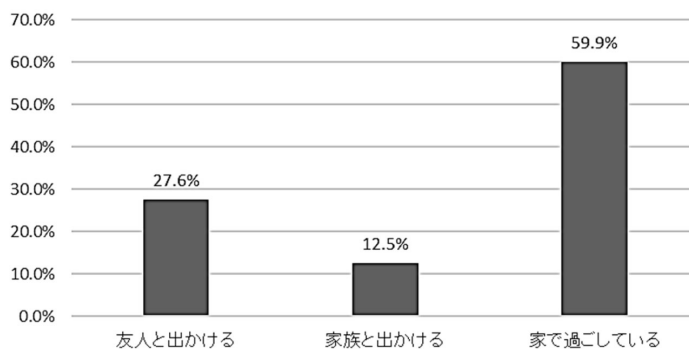
次に、日本の高校生の「一日の携帯電話の使用時間」をみると（グラフ2-10参照）、「持っていない」が14名（1.5%）、「1時間程度」が47名（5.1%）、「1～2時間程度」が172名（18.8%）

グラフ2-8 一日の携帯電話の使用時間

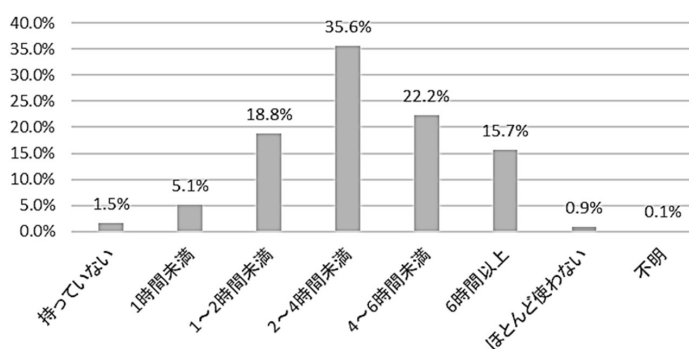


10 筆者が中学・高校時代の友人に大学院で中国について研究していることを話すと、「なぜ学歴をつけるのか」、「中国についての話は不愉快であるため、中国にこれからも行くのであれば友人をやめる」という言葉を投げかけられる。日本では、女性は家庭に入ることが幸せであり、反中感情も強く根付いており、筆者の個性（好み等）を分かってもらえることはなかなかない。

グラフ 2 - 9 休日の過ごし方



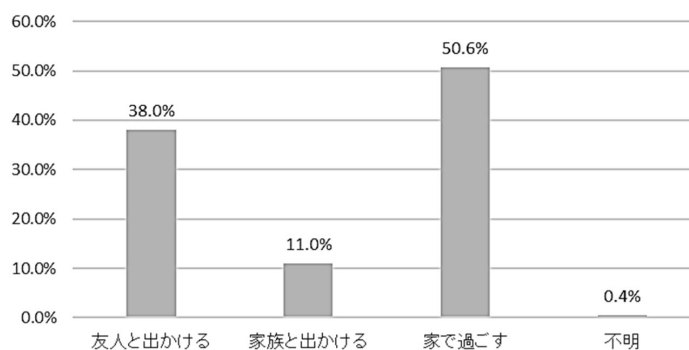
グラフ 2 - 10 一日の携帯電話の使用時間



「2～4 時間程度」が 305 名 (35.6%)，「4～6 時間程度」が 203 名 (22.2%)，「6 時間以上」が 143 名 (15.7%)，「ほとんど使わない」が 8 名 (0.9%)，「無回答」が 1 名 (0.1%) であった。携帯電話を持っていないという生徒が少ないためか，携帯電話の使用時間は少し中国よりも長くなっている。

また，「休日の過ごし方」をみると (グラフ 2 - 11 参照)，「家でのんびり過ごす」が 462 名

グラフ 2 - 11 休日の過ごし方



(50.6%) で一番多く、「友人と出かける」が 347 名 (38.0%)、「家族と出かける」が 100 名 (11.0%) であった。中国と比べ「友人と出かける」割合が高くなっているが、「家で過ごしている」ケースが半数以上おり、両国に大きな違いはない。両国とも、休日は携帯電話を片手にゲームや友人との会話を独りで楽しむことが常態化しているのかもしれない。

第 3 章 将来について

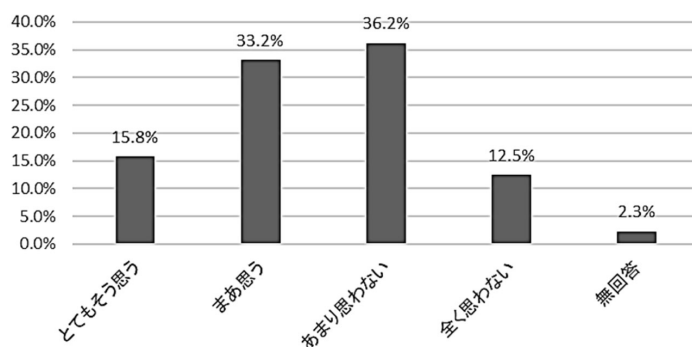
中国の子どもたちの「将来に対する不安」、「希望」などをみると、主に次のような点が指摘できる。

第 1 に、「将来の不安がありますか」をみると (グラフ 3 - 1 参照)、「とても思う」が 62 名 (15.8%)、「まあ思う」が 130 名 (33.2%)、「あまり思わない」は 142 名 (36.2%)、「全く思わない」は 49 名 (12.5%)、「無回答」が 9 名 (2.3%) であった。不安に思う人と思わない人の割合はそれぞれ 4 割程度であり、半々といったところである¹¹。

第 2 に、「希望はいつか叶うと思いますか」をみると (グラフ 3 - 2 参照)、「とても思う」は 203 名 (51.8%)、「まあ思う」は 110 名 (28.1%)、「あまり思わない」は 62 名 (15.8%)、「全く思わない」は 11 名 (2.8%)、「無回答」が 6 名 (1.5%) であった。将来、希望は叶うと信じている子どもたちは多い¹²。半数近くは将来に対する漠然とした不安を感じていたが、思い描く将来像は手に入れることはできるだろうという前向きな姿勢がみられる。

第 3 に、「努力しても必ずしも報われないと思う」をみると (グラフ 3 - 3 参照)、「とても思う」は 65 名 (16.6%)、「まあ思う」は 75 名 (19.1%)、「あまり思わない」は 131 名 (33.4%)、「全

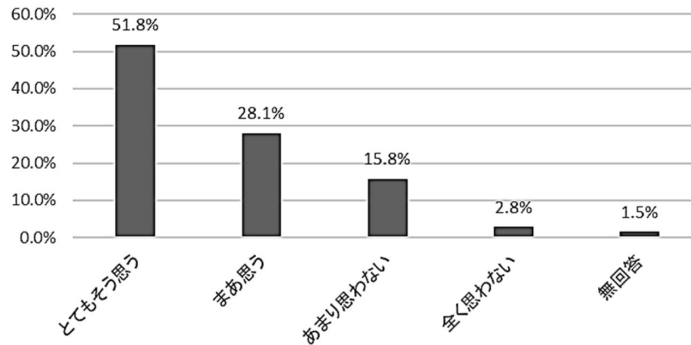
グラフ 3 - 1 将来の不安がありますか



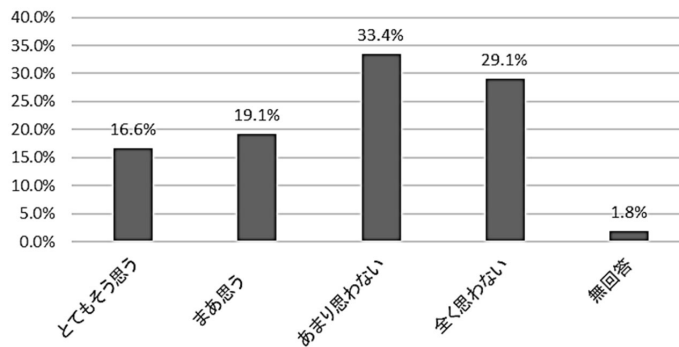
11 「兄弟数からみた将来に不安があるか」をみると、兄弟がいる生徒と一人っ子では、一人っ子の方が「将来に全く不安を感じていない」という割合が 25%と少し大きくなっているが、兄弟がいる人の中ではそれほど差はない。しかし、兄弟数に関わらず、半数近くの人が将来に不安を感じてはいない。

12 「兄弟数からみた希望はいつか叶うか」をみると、「一人っ子」と「四人兄弟以上」が 7 割強の生徒が「いつか叶う」と思っており、2 割強の生徒が「叶わない」と思っている。「二人兄弟」と「三人兄弟」は、「いつか叶う」と 8 割程度の生徒が思っており、1 割強の生徒が「叶わない」と思っている。このように、兄弟数には関係性がみられない。

グラフ 3-2 希望はいつか叶うと思うか



グラフ 3-3 努力しても必ずしも報われないと思う

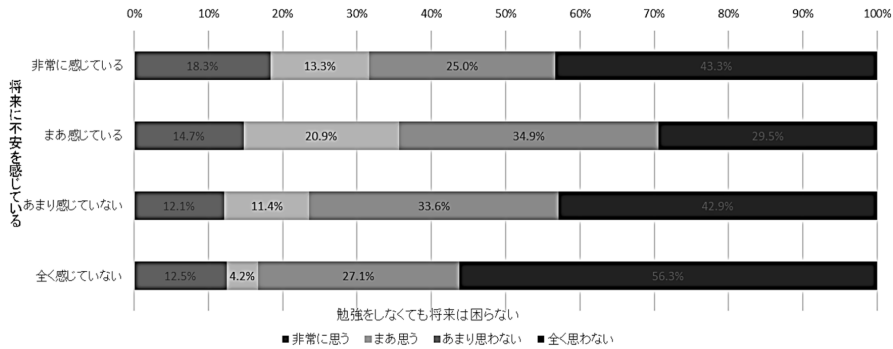


く思わない」は114名(29.1%)、「無回答」が7名(1.8%)となっている。3割強は、努力すれば報われるとは限らないと考えているようだが、肯定的に捉える子どもたちの方が多く、彼らの希望はこうした努力の先に位置づけられているようだ。

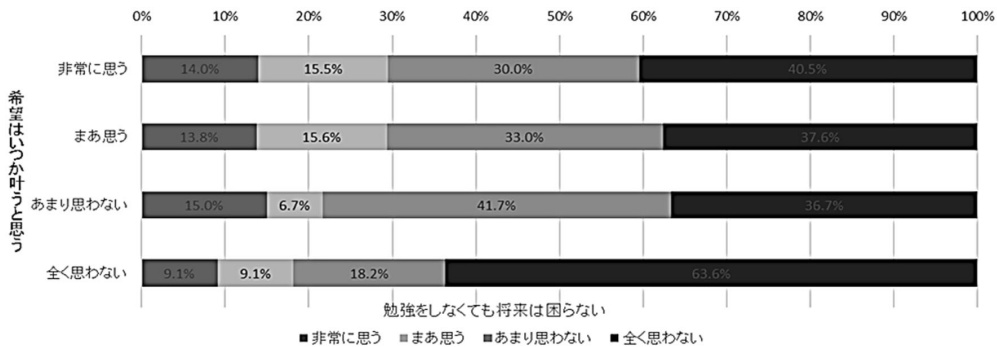
第4に、「将来に不安を感じているか」と「勉強をしなくても将来は困らない」についてみると(グラフ3-4参照)、将来に不安を感じていない人たち(将来に不安を「あまり感じていない」、「全く感じていない」)のなかにおいて、勉強しなくても将来は困らない(「全く思わない」、「あまり思わない」つまり、勉強しなくては将来困る)と答えた人は、76.5%、83.4%と、「勉強しなくては将来困る」と考えている人が多くを占めている。逆に、将来不安を「非常に感じている」「まあ感じている」では、「勉強しなくても困らない」(「非常に思う」、「まあ思う」つまり、勉強しなくても困らない)と考えている割合はそれぞれ31.6%、35.6%であった。そもそも、将来に不安を感じるほぼ半数はその源泉を「勉強」で取り除かれるものではないと考えているのではないかと捉えることができよう。

第5に、「希望はいつか叶うと思う」と「勉強をしなくても将来は困らない」についてみると(グラフ3-5参照)、「希望はいつか叶う」と思っている人ほど「勉強をしなくては将来困る」と考えている人が多い。しかし、上でみたように、「将来に不安を感じている人」はそこまで「勉

グラフ 3-4 「将来に不安を感じているか」からみた「勉強をしなくても将来は困らない」



グラフ 3-5 「希望はいつか叶うと思う」からみた「勉強をしなくても将来は困らない」

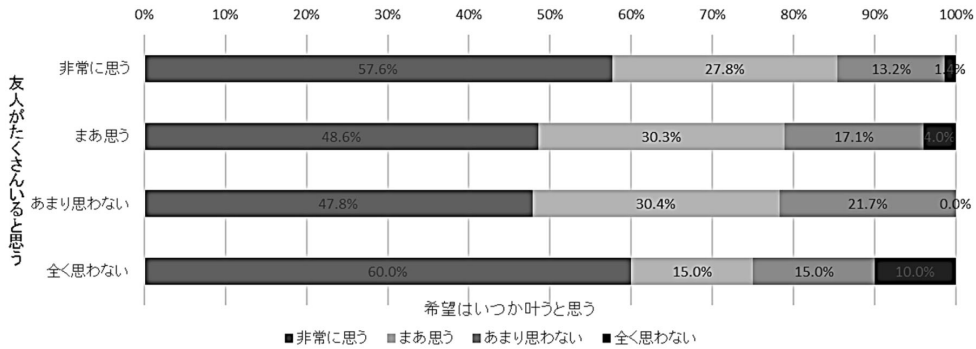


勉強をしなくても将来が困る」とは考えておらず、むしろ、「将来にあまり不安を感じていない人」の方が「勉強しなくては将来困る」と回答している。このことから、将来に不安を感じている人がとにかく勉強をしなくてはと思っているわけではなく、勉強が不安をなくすことはできないと考えているようだ。では、何が彼らの不安を和らげるものとなるのか。

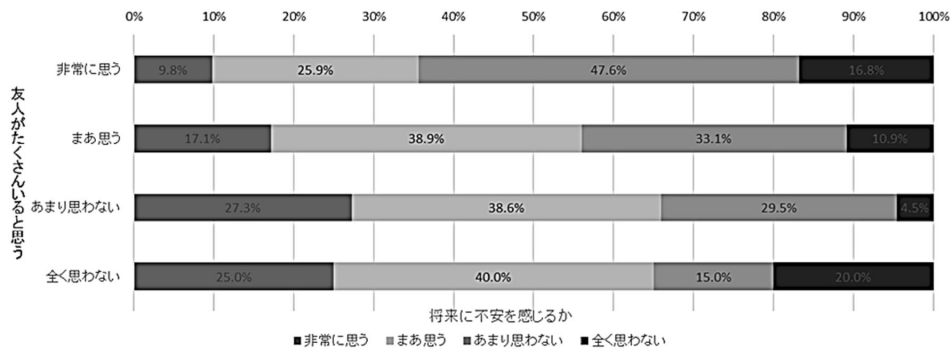
第6に、「友人がたくさんいる」と「希望はいつか叶うと思う」についてみると、「友人がたくさんいる」と思っている人ほど「希望は叶う」（グラフ3-6参照）と回答しており、「友人がたくさんいる」と「将来の不安」についてみてみると、「友人がたくさんいる」と思っている人ほど「将来に不安はない」（グラフ3-7参照）と思っていることがわかる。このことから、勉強だけでなく、「友人」が自分の希望を叶えてくれる存在となり、将来の不安を和らげられていることにもつながっているのではないかと考えられる¹³。ただ、「学年」で「希望はいつか叶うか」をみてみると（グラフ3-8参照）、学年が上がるにつれて「希望はいつか叶う」と思っている人が

13 玄田有史によれば、「希望」を持つためには、ウィークな関係性の重要性を指摘しているが（詳細は玄田（2010）『希望のつくり方』岩波新書を参照）、農民工の子どもたちも、アンケート結果をみる限り、広い友人関係を形成しつつ、それでいて特定の友人に依存しているようではなく、まさに玄田が指摘するウィークな関係性を築いているのではないと思われる。

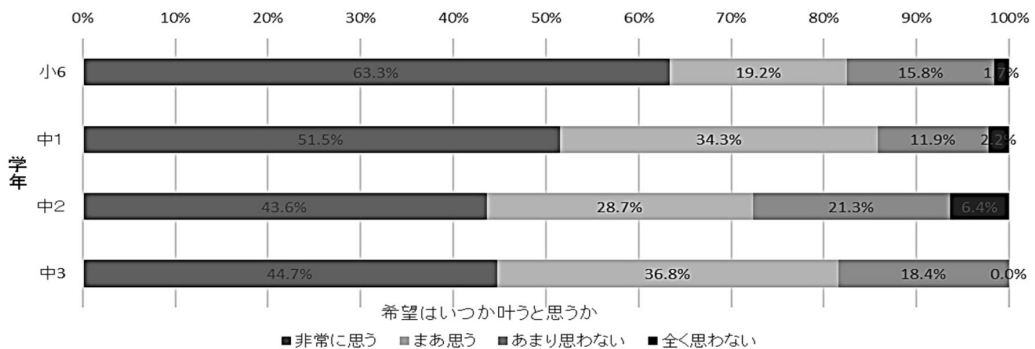
グラフ 3 - 6 「友人がたくさんいる」からみた「希望はいつか叶うと思う」



グラフ 3 - 7 「友人がたくさんいる」からみた「将来の不安を感じるか」



グラフ 3 - 8 「学年」からみた「希望はいつか叶う」

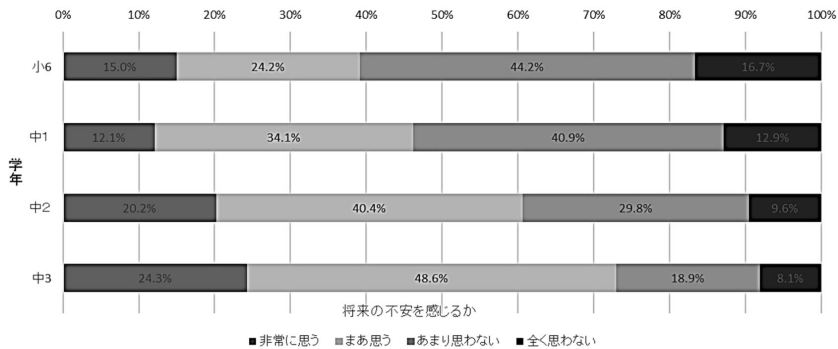


減少している。また、(グラフ 3 - 9 参照) からは、「学年」で「将来に不安を感じているか」をみると、学年が上がるほど将来に不安を感じている人が少しずつ増えている。将来を考え、社会に出ることが身近になると不安になり、希望も叶わないと思うようになるのだろうか。

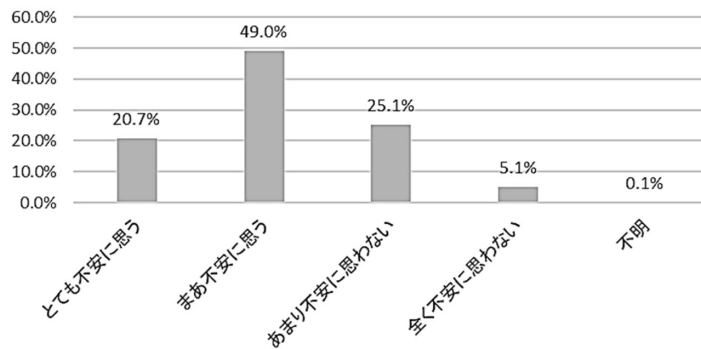
次に、日本の高校生の将来の不安などについてみると、主に次のような点が指摘できる。

第 1 に、「将来に対して不安がありますか」をみると (グラフ 3 - 10 参照), 「とても不安に思

グラフ 3 - 9 「学年」からみた「将来に不安を感じるか」



グラフ 3 - 10 将来に対して不安があるか

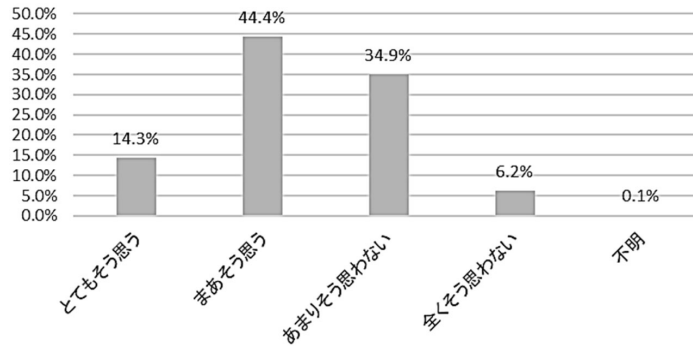


う」が189名(20.7%)、「まあ不安に思う」が447名(49.0%)、「あまり不安に思わない」が229名(25.1%)、「全く不安に思わない」が47名(5.1%)、「不明」が1名(0.1%)となっている。中国と比較すると、「不安」に感じる割合が非常に高くなっている。このような結果は両国の経済状況の違いも影響しているのではないかと考えられる。

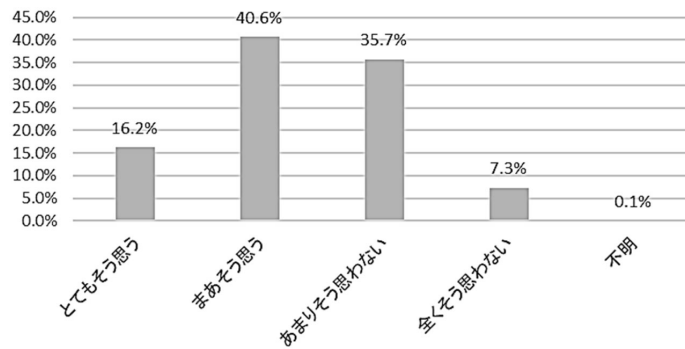
第2に、「自分の希望はいつか叶うと思うか」をみると(グラフ3-11参照)、中国では「とても思う」が51.8%の人がそう答えるのに対し、日本は131名(14.3%)しか「とても思う」と考えおらず、逆に「あまり思わない」の割合が高くなっている。

第3に、「努力しても必ずしも報われないと思うか」をみると(グラフ3-12参照)、日本は「とても思う」が148名(16.2%)と「まあ思う」が371名(40.6%)となり、「全く思わない」が67名(7.3%)と「努力は報われにくい」と考えている人が圧倒的に多い。これは、希望を持つことや、努力をすることがむなしいという社会が想定されており、日本の子どもたちからは暗さを感じる結果となった。実際、高校においても、目の前の定期試験でいくら良い点をとったり、授業を理解したりしたとしても、自分の人生が変わる、開かれるとは考えられないという声をしばしば聞く。そのため、「何のために勉強をするのかが分からない」というのは彼ら高校生の口癖でもある。モチベーションがなく、やる気も希望も生まれないのであろう。

グラフ 3 - 11 希望はいつか叶うと思うか



グラフ 3 - 12 努力しても必ずしも報われないと思うか



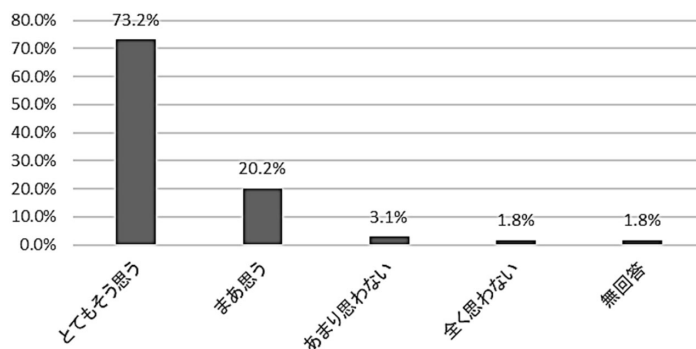
第 4 章 社会・国家について

中国の子どもたちの祖国に対する誇り、未来についてみると、次のような点が指摘できる。第 1 に、「国に誇りをもっていますか」をみると（グラフ 4 - 1 参照）、「とても思う」は 287 名（73.2%）、「まあ思う」は 79 名（20.2%）、「あまり思わない」は 12 名（3.1%）、「全く思わない」は 7 名（1.8%）、「無回答」が 7 名（1.8%）であった。国に誇りを持っている人がとても多い。

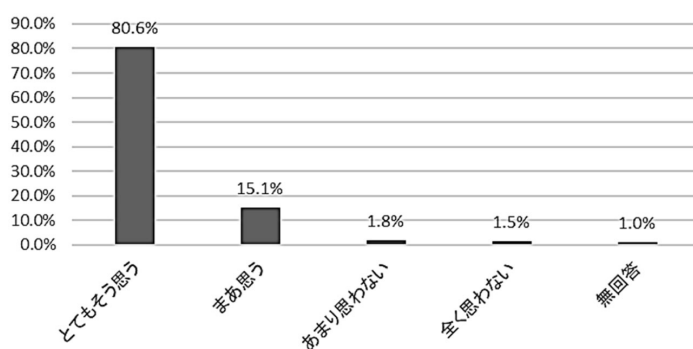
第 2 に、「中国の未来は明るいですか」をみると（グラフ 4 - 2 参照）、「とても思う」は 316 名（80.6%）、「まあ思う」は 59 名（15.1%）、「あまり思わない」は 7 名（1.8%）、「全く思わない」は 6 名（1.5%）、「無回答」が 4 名（1.0%）であった。「国に誇りをもっている」と比べると「明るい」と答えた人たちの割合は少し下がるが、それでもほぼ 8 割が中国の未来を明るいと感じている。

第 3 に、「中国で暮らすことに満足していますか」をみると（グラフ 4 - 3 参照）、「とても思う」は 117 名（29.8%）、「まあ思う」は 202 名（51.5%）、「あまり思わない」は 44 名（11.2%）、「全く思わない」は 25 名（6.4%）、「無回答」が 4 名（1.0%）であった。8 割強が満足を示している（ただし不満派も多少は存在している。どのあたりに不満を抱えているのか気になる点でもある

グラフ 4 - 1 国に誇りを持っているか



グラフ 4 - 2 中国の未来は明るい



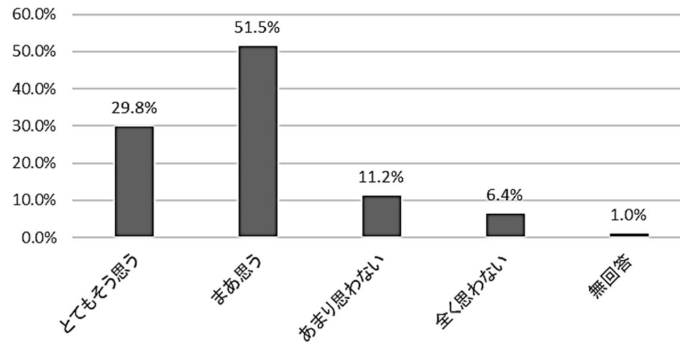
が、その詳細については今後の課題としたい)¹⁴。

第4に、「今の社会は貧富の差が大きいですか」をみると（グラフ4-4参照）、「とても思う」は155名（39.5%）、「まあ思う」は147名（37.5%）、「あまり思わない」は75名（19.1%）、「全く思わない」は9名（2.3%）、「無回答」が6名（1.5%）であった。貧富の差があると感じている人が8割弱いる¹⁵。

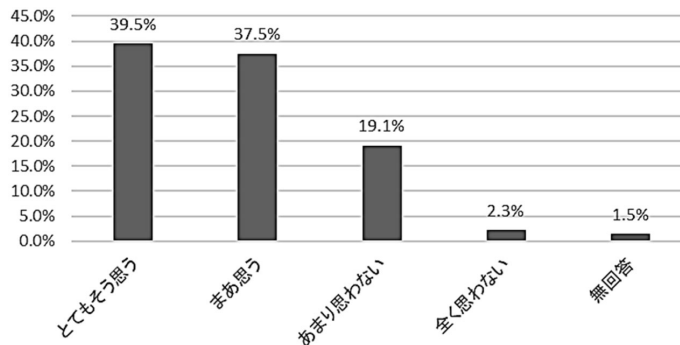
14 「中国で暮らすことに満足をしているか」をみると、兄弟がいても一人っ子であっても、「満足している」と8割の生徒が答え、「満足していない」と2割の生徒が答えており、兄弟数による差はみられなかった。兄弟がいてもいなくても、希望は叶うと思っている人が多く、中国で暮らすことには大半の人が満足をしている。このことから、兄弟数によって生活が制限され、未来が制限されると受けとめている生徒はほとんどいないようである。

15 「今の社会は貧富の差が大きいか」をみると、基本的に兄弟数に関わらず、貧富の差が大きいと答えているが、兄弟数が多くなればなるほど「非常に大きいと思う」と答えている人が、「一人っ子」から順に35.7%、39.1%、41.9%、42.7%と少しずつ貧富の差が大きいと答えている割合が増えている。逆に、「あまり貧富の差が大きい」と答えている割合は、「一人っ子」で21.4%、「二人兄弟」で24.2%、「三人兄弟」で16.2%、「四人兄弟以上」で13.3%と「一人っ子」と「二人兄弟」で比較的割合が高くなっている。このことから、兄弟が多いほど、貧富の差が大きいと感じる傾向が僅かであるがみられる。

グラフ 4-3 中国で暮らすことに満足をしているか



グラフ 4-4 今の社会は貧富の差が大きいと思うか



これら4点から、農民工子弟たちは、中国で暮らすことにそれほど不満を抱えていないことがみてとれる。これまでの農民工についての先行研究では、とくに新保や阿古らによって¹⁶、農民工の子どもたちが劣悪な環境の下で教育を受ける姿が描かれることが少なくはなく、教育や環境の改善が求められている。しかし、上述した結果をみれば、「劣った場所」でも、国に誇りを持ち、未来は明るいと感じており、中国で暮らすことに満足をしているといえよう。もちろん、そのような意識は子どもならではの考えと一蹴されそうだが、「今の社会は貧富の差がありますか」の回答では、大半の生徒が「貧富の差はある」と答え、社会の状況を正確に認識する力を備えているようにも映る。それゆえ、高い満足度の背景は、必ずしも無知からの「満足」ではないと考

16 新保は「農民工子弟学校に通う割合は少ない。教育条件の良い公立学校に就学できるようになったことは、農村からの出稼ぎ家族にとっては、改善と考えることができる」（新保・阿古.2016.P.78）や、「ただし都会の児童の中で農村出身児童は蔑視され居場所が無いことも多く、農民工子弟学校に通学することもある。農民工子弟学校の中には、たとえば壁に穴があいていたり、教師のレベルが不十分なため、授業においても教師がただ単に生徒に教科書を読ませるだけの学校もある（新保・阿古.2016.P.83）。また、「なぜ流動するのだろうか。それは、都市部の方が教育レベルが高いからである（新保・阿古.2016.P.85）」と指摘している。

えられる。

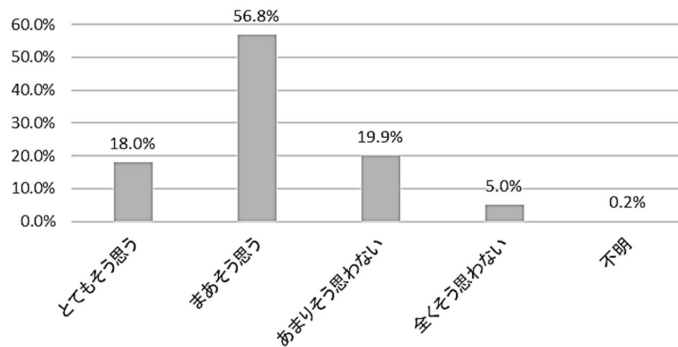
次に、日本の高校生の回答をみると、主に次のような点が指摘できる。

第1に、「自分の国に誇りを持っていますか」をみると（グラフ4-5参照）、中国では7割弱の人が「とても思う」と答えたのに対し、日本は1割強の人しか誇りに思うと捉えていない¹⁷。

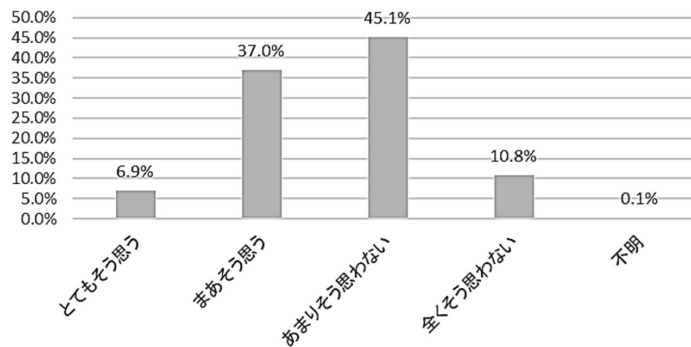
第2に、「国の未来は明るいですか」をみると（グラフ4-6参照）、「とても思う」という割合が中国では8割強だったのに対して、日本は1割もない結果となっている。

第3に、「自国で暮らすことに満足していますか」をみると（グラフ4-7参照）、「とても満足している」が日本は4割の人が満足と答えている。中国では3割弱の人であった。日本は国を誇りにも思えず、未来も明るいと思っていないのにも関わらず満足をしている割合は比較的多い結果となった。とりあえず、現状が楽しければ（携帯電話で遊ぶ時間が確保されていれば）満足できるかということなのだろうか。いずれにしても、日中では大きな違いがみられる結果である。

グラフ4-5 自分の国に誇りを持っていますか

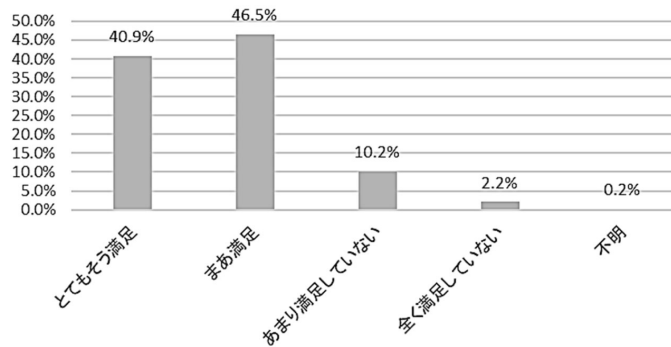


グラフ4-6 国の未来は明るい



¹⁷ 日本の子どもたちや私の友人・知人も日本以外の国を見下し、日本は素晴らしいと捉えている人は少なくない気がするが、今回の結果では、そのような誇りは強く現れてはいなかった。

グラフ 4-7 自国で暮らすことに満足しているか



第5章 友誼学校に通学する農民工子弟

第1節 子どもたちの就業について

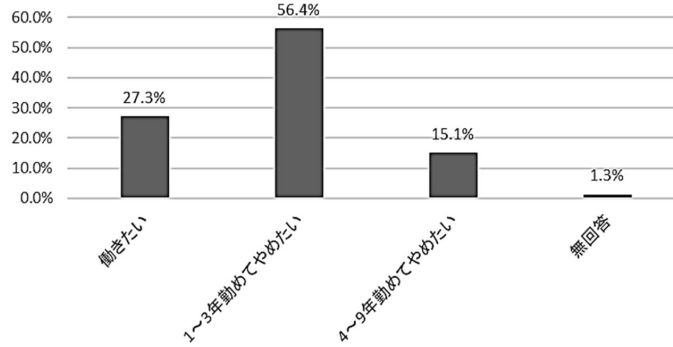
友誼学校の子どもたちの就業について不安要素、重視する点などをみると次のような点が指摘できる。

第1に、「あなたは一番初めに就職した会社で定年まで働きたいですか」という問いをみると(グラフ5-1参照)、「定年まで働きたい」が107名(27.3%)、「1~3年勤めてやめたい」が221名(56.4%)、「4~9年勤めてやめたい」が59名(15.1%)、「無回答」が5名(1.3%)であった。同じ会社で働きたいと思っている人の割合は3割弱で、転職を前提としている割合、とくに3年以内での転職希望の割合が半数以上を占めている¹⁸。

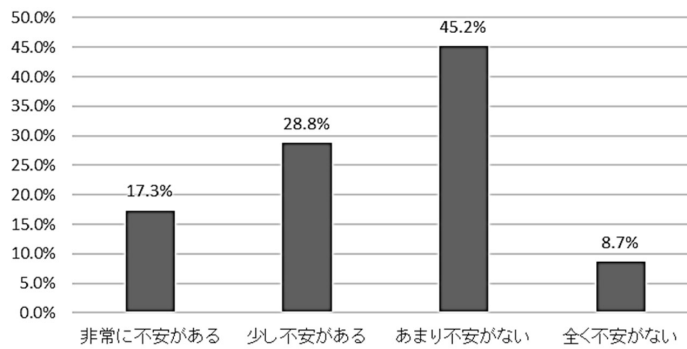
第2に、「就職する上での不安はありますか」をみると(グラフ5-2参照)、「非常に不安がある」が68名(17.3%)、「少し不安がある」が113名(28.8%)、「あまり不安がない」が117名(45.2%)、「全く不安がない」が34名(8.7%)であった。不安を抱いていない割合の方が高くなっているが、「具体的に就職する上での不安を抱いていること」をみると(グラフ5-3参照)、「自分の能力」が150名(38.3%)でもっとも多い。そして「雇用条件」に不安を感じると答えた人が72名(18.4%)、「人間関係」に不安を感じる人が65名(16.6%)、「給料」が40名(10.2%)、「会社の勤務体制」が33名(8.4%)、「不安がない」が31名(7.9%)、「無回答」が1名

18 中村圭(2019)は、青島市のアパレル企業(国有企業)における人材流動についての調査を行い、転職や起業を繰り返す実態を克明に描き出している。これまでの日本の研究では経営側からみれば人材流動はマイナス要因と捉えられることが多かったが、中村は知識・技術、さらには広い人間関係を有する人材の流動を通して、企業には多様で最新の情報がもたらされプラスになることの方が多いとしている。また、人びとの視点でみれば、さまざまな職場を渡り歩くことを通して、知識・技術、人間関係が蓄積され、それが能力向上に繋がるとしている。もっとも、中村が対象としているのは、主に大学出身者を中心とした高学歴層であり、農民工の子どもにそのまま当てはめることはできないかもしれないが、今後、農民工の子どもたちの追跡調査を実施し、転職を通して、低学歴層の人びとに知識・情報、人間関係が蓄積され、それが起業へと結びつくかどうか、調べていきたい。

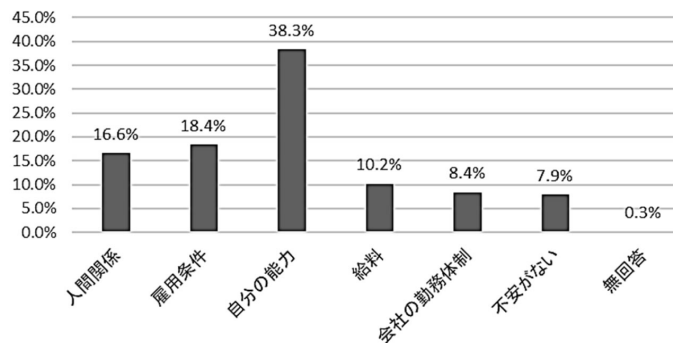
グラフ 5 - 1 一番初めに就職した会社で定年まで働きたいか



グラフ 5 - 2 就職する上での不安はありますか



グラフ 5 - 3 具体的に就職する上での不安を抱えていること



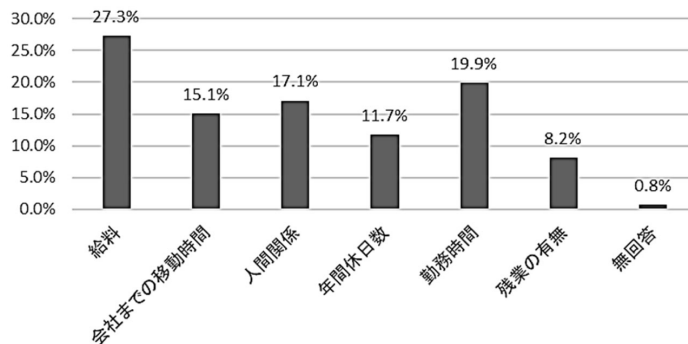
(0.3%) と続いている。このように「自分の能力」に不安を感じている割合が高く、4 割弱を占めている。上述したように勉強に関しては自信を持っている子どもは少なくなかったが、社会で通用する能力と勉強ができることは異なるものであると考えているためだろう。まだ働いた経験もない彼らにとっては、何が働くための能力なのかが、まだ描くことができず、漠然とした不安を抱いているようでもある。

第3に、「就職する上で重視することは何か」をみると（グラフ5-4参照）、「給料」が最も多く107名（27.3%）、「勤務時間」が78名（19.9%）、「人間関係」が67名（17.1%）、「会社までの移動時間」が59名（15.1%）、「年間休日数」が46名（11.7%）、「残業の有無」が32名（8.2%）、「無回答」が3名（0.8%）であった。不安項目ではそれほど多くの人が挙げなかった「給料」の割合が高く、勤務時間や会社までの移動時間、人間関係が重視されている。

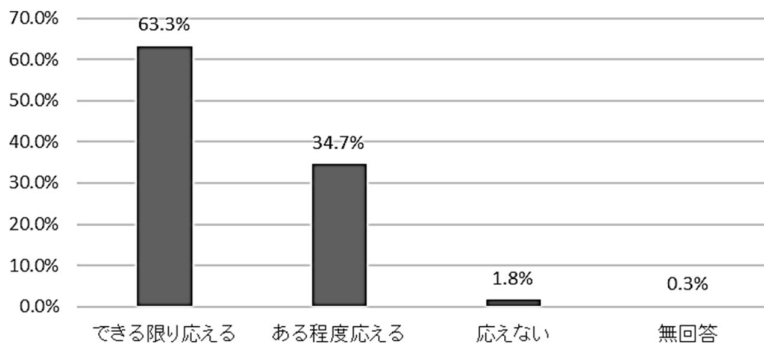
第4に、「あなたが働いているとき無理難題（クレーム）を言うてくる客がいたとき、要求に応えますか」をみると（グラフ5-5参照）、「できる限り応える」が248名（63.3%）、「ある程度応える」が136名（34.7%）、「応えない」が7名（1.8%）、「無回答」が1名（0.3%）であった。9割以上が客の要求に応えようと回答しているが、感情労働¹⁹が日本ほど浸透しているとはいえない中国においてこのような結果はかなりの驚きであった。

次に、日本の高校生の就業についての考え方をみると、主に次のような点が指摘できる。

グラフ5-4 就職する上で重視することは何か



グラフ5-5 働いているとき無理難題を言うてくる客がいたとき、要求に応えますか



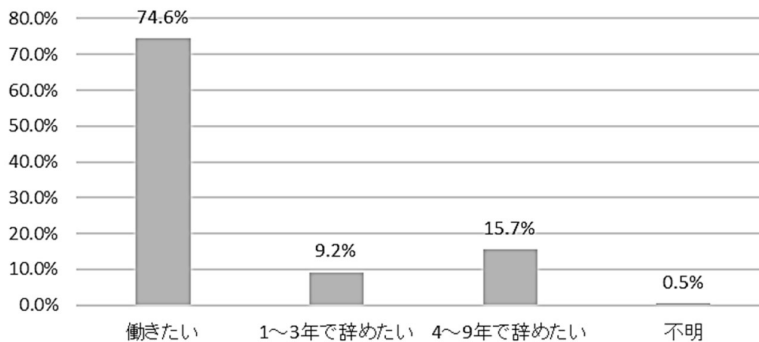
19 筆者は、卒業論文でA.R.ホックシールド（2000）『管理される心 感情が商品になるとき』（世界思想社）を参考に日本と中国のサービス業の違いについて論じたが今後、この問題も1つの研究テーマとして扱っていきたい。

第1に、「一番初めに就職した会社で定年まで働きたいか」をみると（グラフ5-6参照）、「定年まで働きたい」が7割程度に上り圧倒的に高い。上でみたように中国では「定年まで働きたい」は2割強であり、「1年から3年でやめたい」と考えている割合が多くなっている点と比べ大きな違いがみられる。

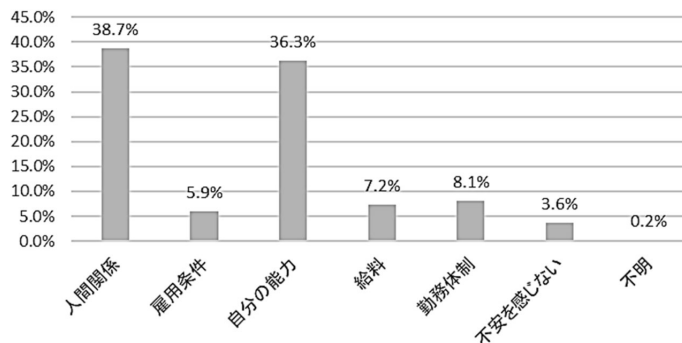
第2に、「就職する上での不安はありますか」という問いでは、中国では「あまり不安がない」と答えた割合が4割強いるのに対して、日本では1割弱であった。また「具体的に就職する上での不安を抱えていること」をみると（グラフ5-7参照）、両国ともに自分の能力に不安を感じている人が多いのに続いて、日本は人間関係が圧倒的に高く、4割近くの人が不安を感じている（中国は「人間関係」と「雇用条件」となっている）。さらに、「就職する上で重視すること」は（グラフ5-8参照）、日本は「給料」が最も高く、続いて人間関係、年間休日数を重視すると答えている。

第3に、「もしあなたが働いているとき無理難題（クレーム）を言ってくる客がいたとき、要求に応えますか」をみると（グラフ5-9参照）、「できる限り応える」が59名（6.5%）、「ある程度応える」が749名（82.0%）、「応えない」が100名（11.0%）、「無回答」が5名（0.5%）であった。上述した中国と比べ、「できる限り応える」とする割合には大きな差があり、日本の割

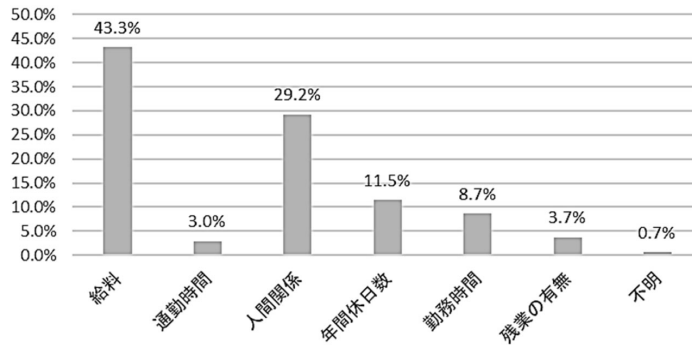
グラフ5-6 一番初めに就職した会社で定年まで働きたいか



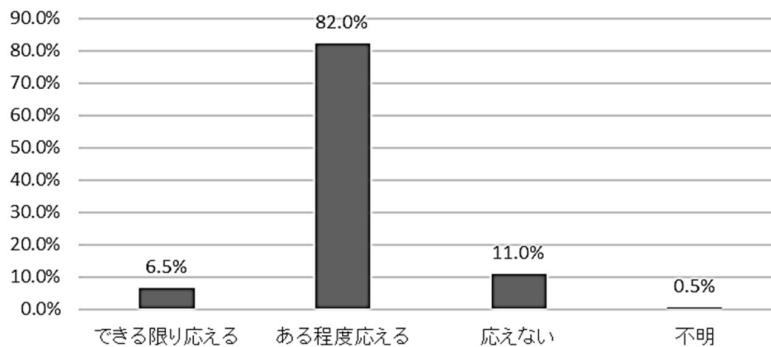
グラフ5-7 具体的に就職する上での不安を抱えていること



グラフ 5 - 8 就職する上で重視することは



グラフ 5 - 9 働いているとき無理難題を言ってくる客がいたとき、要求に応えますか



合は非常に低い。サービスが素晴らしい、最高だといわれる日本の方が中国よりもかなり低い結果となっているが、このような結果は、筆者が推測したものとは真逆なものであり、非常に驚かされた。しかし、よくよく考えてみれば、日本と中国のサービス業の実態を比べれば、とりわけ驚くこともない結果である。確かに中国人は不愛想で、サービス精神の欠片もないといわれるが、「できる限り要求に応えよう」としてくれるサービスを経験したことはしばしばある。たとえば、筆者は、レストランでよく「黄ニラとたまご炒め」を注文するのだが、たまたま「黄ニラ」が「ない」としても、どうしても「食いたい」と我儘をいうと、大抵は従業員が近くの市場かスーパーへ走っていき、「黄ニラ」を購入してきてくれるのだ。このような無理難題ともいえる我儘を聞いてもらったことを挙げれば切りがない。ところが、日本ではどうだろうか。確かに笑顔は素晴らしい。だが、そのような我儘をいっても無視されてしまうことだろう。実際、筆者も飲食店で学生時代アルバイトをした経験があるのだが、メニューにないものはつくれない。また、子どもだから量を減らしても価格はそのまま、何か腑に落ちないサービスを提供せざるを得ない状況というものも少なくなかった。このような違いをみると、その背後には、マニュアル化されたサービスとそうではないサービスの違いがあるのではないだろうか。日本の高校生はアルバイトの経験から、すでにマニュアル化に慣れ親しみ、マニュアルに書かれていないことをやる必要

はないと考えているのではないだろうか。またはマニュアルに書かれた仕事しかできず、マニュアルの仕事をごこなせることが能力の高さであると勘違いしているかもしれない。逆に、中国ではそのようなマニュアル化された現場は少なく、自由裁量権²⁰が与えられ、自らの能力を磨くチャンスが残されている可能性は高いのではないだろうか。

第6章 「商売」についての考え方

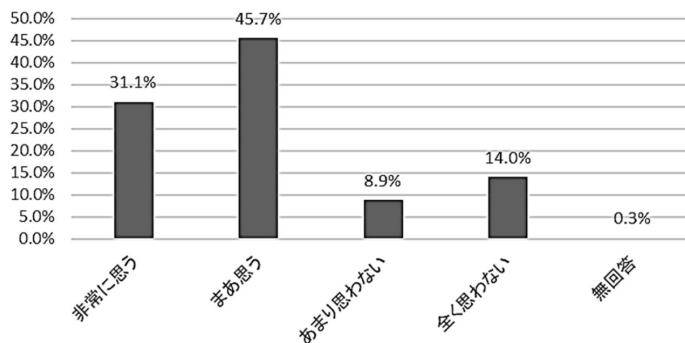
第1節 友誼学校に通学する生徒の「商売」に関しての考え方

本章では、友誼学校に通学する生徒の「商売」に関しての問いについてみていきたい。「商売」についてだけを取り上げ考察していく理由は、2017年3月に行ったヒアリング調査において、40名の中学3年生の生徒たちの多くが、「将来の夢」を問うたところ「商売を始めたい」、「経営者になりたい」と言う生徒が多かったためである。上述したように、6月に卒業をする40名の生徒たちの進路は3月の時点ではほとんど決まっていなかったものの、将来の夢は「経営者」と答える生徒たちをみて、「商売」についてどのように考えているのかを詳しく考察するため、この質問を用意した。

友誼学校の子どもたちの「商売」についての考え方をみると、主に次のような点が指摘できる。

第1に、「将来商売を始めたいと思いますか」をみると（グラフ6-1参照）、「非常に思う」は122名（31.1%）、「まあ思う」は179名（45.7%）、「あまり思わない」は35名（8.9%）、「全く思わない」は55名（14.0%）、「無回答」は1名（0.3%）であった。このように将来、商売を始めたいと思う割合が8割弱ととても高い割合を示し、多くの子どもたちが商売を始めることを夢みていることがわかる。また、このような結果は、ヒアリング調査においても子どもたちからよ

グラフ6-1 将来、商売を始めたいか



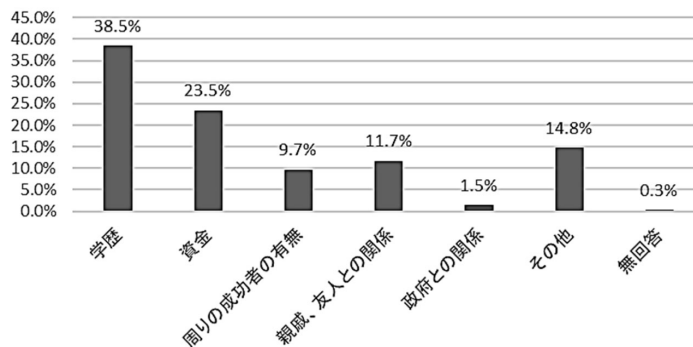
20 改革・開放以降の中国経済成長の一つの要因として、この「自由裁量権」の存在を指摘されることは少なくない（加藤 2016）。また、中村（2019）は、具体的にこの「自由裁量権」を手にした人びとが躍動する姿を描いている。

く聞かされた話であり、農民工の人たちとの宴会の席で大人たちもが口にするものである。そのため、上でみたように「定年まで働きたいですか」という問いに対して、「1～3年でやめたい」と答える人が多いのであろう。言い換えれば、1～3年で職場を離れたとしても、別の職場を探して賃金労働者になるとは限らず「商売」を始める可能性を否定することはできない。もちろん、1～3年である必要もなく10年後であるかもしれないが、いずれにせよ、子どもたちは人に雇われるのではなく、自分で商売を始めたいと考えているといえるであろう。

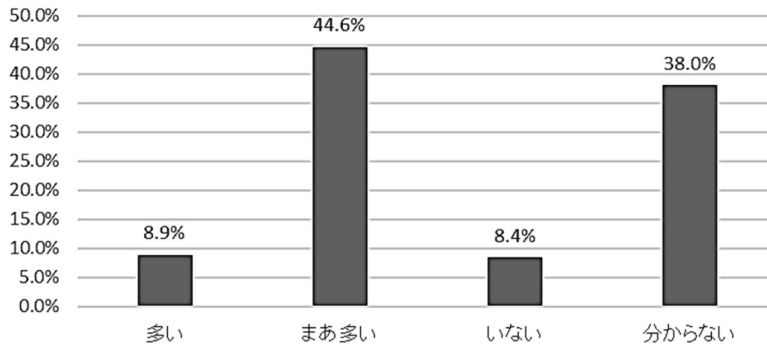
第2に、「商売をする上で何が最も重要であると思うか」をみると（グラフ6-2参照）、「学歴」が最も多く151名（38.5%）であった。上述したように「勉強が重要だ」と答える割合は高かったが、将来どの程度の教育を受けたいかという問いに対してはとりわけ高い学歴を求めている様子はみとれなかった。8割弱の人が商売を始めたいと考えているにも関わらず、商売をする上では「学歴」が必要だと答えたのは、選択肢に「自分の能力」がなかったためだろうか。上述したように、友誼学校の子どもたちの自己主張は強く、「商売」を始めるためには何よりもまず「自分の能力」を高めることが重要と考えるのではないかと推測される。次に高かったのは、「資金をもっていること」が92名（23.5%）、「その他」が58名（14.8%）、「親戚、友人との関係」が46名（11.7%）、「周りの成功者の有無」が38名（9.7%）、「政府との関係」が6名（1.5%）、「無回答」が1名（0.3%）であった。中国では、商売を始めるため、成功させるためには、何よりも「人間関係」が重要であるといわれているが、子どもたちの回答をみる限り、「成功者の有無」、「政府との関係」の割合は低い。若さゆえと言ってしまえばそれまでだが、自らの力で切り開きたいという思いが強いのではないかとと思われる。

第3に、「親戚・知り合いなど商売で成功している人が周りにいるか」をみると（グラフ6-3参照）、商売で成功している人が「多い」が35名（8.9%）、「まあ多い」が175名（44.6%）、「少ない」が33名（8.4%）、「分からない」が149名（38.0%）であった。5割強の人が周りに商売で成功した人が「多い」と回答している。もちろん、子どもたちが親戚や知人の商売が成功しているかどうか、その詳細までを知ることは難しいだろうが、少なくとも彼らの周りには「商売」をしている人が多いといえるだろう（「分からない」と答えた人は、何をもって成功としている

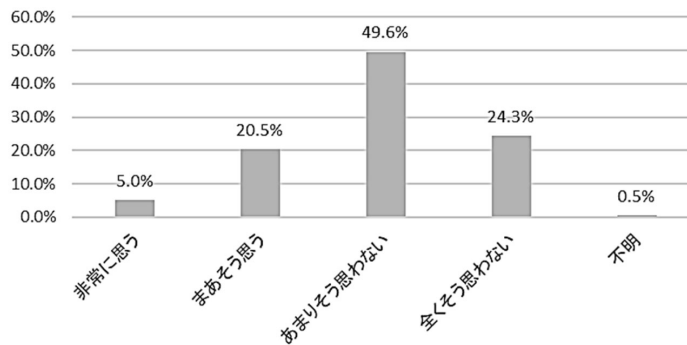
グラフ6-2 商売を始める上で何が最も重要化



グラフ 6 - 3 親戚・知り合いなど商売で成功している人が周りにいるか



グラフ 6 - 4 将来商売を始めたいと思うか



のかわからず、「分からない」と回答している可能性もある)²¹。

日本の高校生の結果では、「商売を始めたいですか」をみると（グラフ 6 - 4 参照）、「非常に思う」は 46 名（5.0%）、「まあそう思う」は 187 名（20.5%）、「あまりそう思わない」は 453 名（49.6%）、「全くそう思わない」は 222 名（24.3%）、「無回答」は 5 名（0.5%）であった。このように「とてもそう思う」と「まあそう思う」を併せても 2 割程度であり、8 割近くが「商売を始めたい」とする中国と比べ非常に大きな違いがある。何故、このような違いが生まれているのか、詳細については次節で詳しく述べたい。

21 実際、海寧市のレストランや雑貨店、さらには屋台にはいると農民工子弟の両親や親戚が経営者であったり、従業員として働いているケースが多い。また、建築現場などで働く両親の姿を目にすることがある。なかには 3 K 労働の現場であることは少なくない。こうした肉体労働に対する子どもたちに聞くと次のような結果が得られた。「あなたは農業、工業、建築業の現場で汗水をたらして働くことは人間の美德だと思いますか」という問いに対しては、「とてもそう思う」は 187 名（47.7%）、「まあそう思う」は 160 名（40.8%）、「あまりそう思わない」は 35 名（8.9%）、全くそう思わないは 10 名（2.6%）と職業に関する偏見はないようだ。

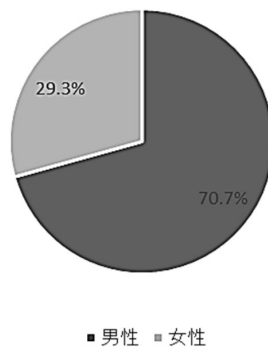
第2節 「商売」に関する日中比較

上述したように日本の高校生で「商売を始めたい」（「とてもそう思う」と「まあそう思う」を併せて）と答えているのは約2割程度であった。ただし、人数にすると233名いるため、本節では、この233名を対象として「商売を始めたい」と答えた人たちの特徴をみていきつつ、両国における「商売を始めたい」と答えている人の特徴も比較していきたい。以下、両国の特徴として主に次のような点が指摘できる（なお、使用するグラフは中国の場合は全体で、日本の場合は商売を始めたいと思っている層だけを取り出したため、直接の比較はできないが傾向の違いをみていく。また、「無回答」は統計から除外した。）。

第1に、「性別」と「商売を始めたい」の関連性をみれば、日本の高校生では（グラフ6-5参照）、男性が70.7%と女性が29.3%と男性の方が圧倒的に商売を始めたいと考えている人が多いことがわかる。しかし、中国では（グラフ6-6参照）、男性76.8%と女性77.1%と男女比に大きな差はない。日本の女性が商売を始めたいと思う人が少ないのは、女性が社会に出て活躍すること自体、まだあまりないようにもみられるためか、ましてや自分でバリバリと仕事をしたいと考えている女性が少ないためであろう。また、日本の男性は女性に家庭に入ってもらうことを望んでいるということも背景にあると考えられる²²。それに比べて中国では、性別に関係なく社会で活躍することを望む実態が浮かびあがる。

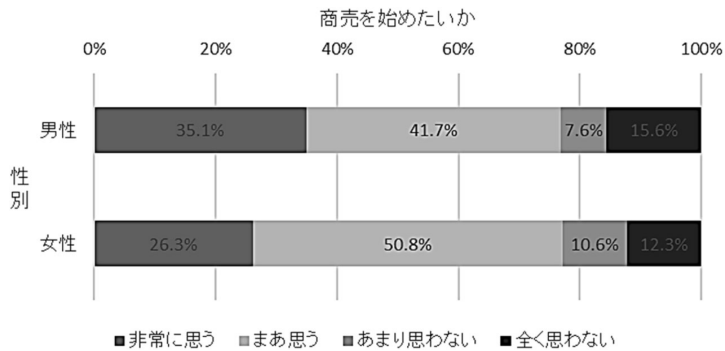
第2に、「学年」と「商売を始めたい」の関連性をみれば、日本では（グラフ6-7参照）、高校1年生が31.3%、高校2年生が26.6%、高校3年生が42.1%となっている。また、中国では

グラフ6-5 「性別」からみた「商売を始めたい」

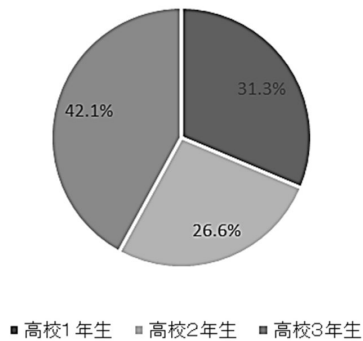


22 日本において女性が社会で働くことに対して男性（とくに夫）は快く思わないケースが多い。筆者は、中国研究には関係ないが、日本における女性の社会進出についても研究を進めている。その成果の一つとして次のようなものがある。川村潤子・原田忠直「NPO法人マザーズライフサポーターの痛切な歩みが意味するもの―母たちは、停滞する既存の社会制度を尻目に、自分たちの望む社会を作り始めた―マザーズライフサポーター」（『日本福祉大学経済論集』（第57号）pp.59-81 日本福祉大学経済学会 2018）。

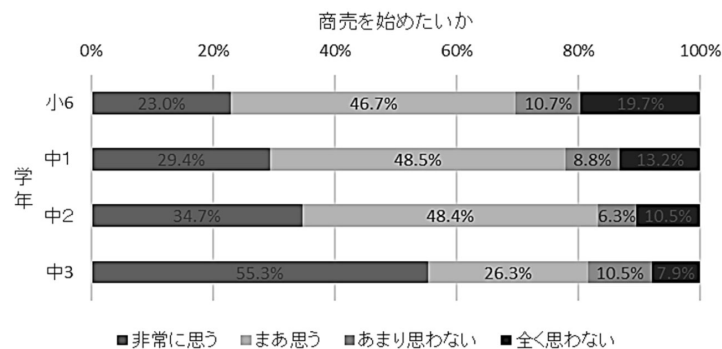
グラフ 6-6 「性別」からみた「商売を始めたい」



グラフ 6-7 「学年」からみた「商売を始めたい」



グラフ 6-8 「学年」からみた「商売を始めたい」

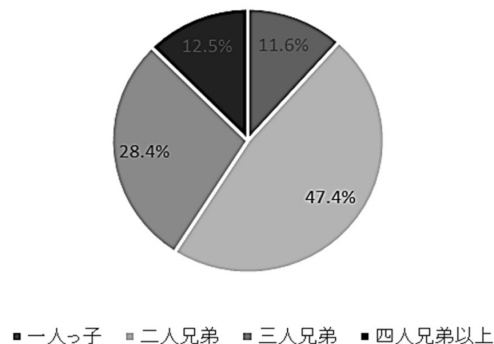


(グラフ 6-8 参照)、「商売を始めたい」と「非常に思う」及び「まあ思う」と考えている人は小学6年生では69.7%，中学1年生では77.9%，中学2年生では83.1%，中学3年生では81.6%となっている。両国とも最終学年になるにつれて、「商売を始めたい」と思っている人が増加する傾向があるようだ。とくに、中国の場合には、中学3年生の人は、商売を「非常に始めたい」と考えている人だけを見ても、55.3%ととても高い数値を示している。

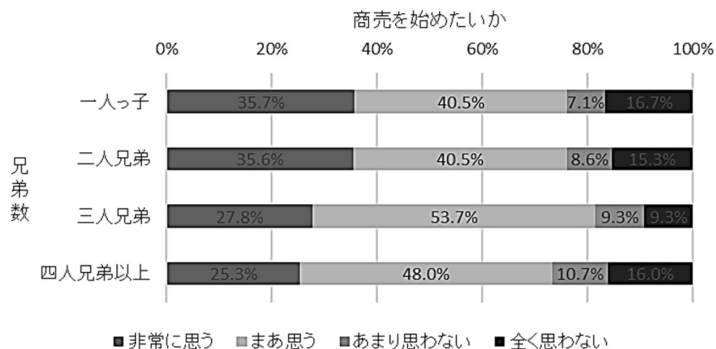
第3に、「兄弟数」と「商売を始めたい」の関連性をみれば、日本では（グラフ6-9参照）、「一人っ子」は11.6%、「二人兄弟」は47.4%、「三人兄弟」は28.4%、「四人兄弟以上」は12.5%であった。兄弟が増えるにつれて、商売を始めたいと思っている割合が小さくなっている。中国では（グラフ6-10参照）、「一人っ子」でも「三人兄弟以上」であったとしても、商売を始めたいと考えている割合に差はない。中国では、兄弟が多くても日常生活で我慢したり制約を受けたりすることがないのであるが、日本では兄弟が多くなるにつれての制約等があるのではないかと推測される。

第4に、「友人数」と「商売を始めたい」の関連性をみれば、日本では（グラフ6-11参照）、「たくさんいる」と「非常に思う」及び「まあそう思う」と答えている人が8割弱、中国でも（グラフ6-12参照）8割弱おり、両国とも友人が多い方だと思っている人が大半を占めている。また、何かあったときには助けてくれる友人がいることは、日本では（グラフ6-13参照）、「悩みを打ち明けられる友人」が「1～4名」が約7割いるのに対して、中国では（グラフ6-14参照）、「悩みを打ち明けられる友人」は「5～9名」がもっとも多くなっている。とくに、中国では、相談する人がゼロと答えている人も3割弱いて、自分一人で解決をしようとしている人が多いが、「商売を始めたい」と思っている人のなかで「5～9名」の相談できる相手がいると答えて

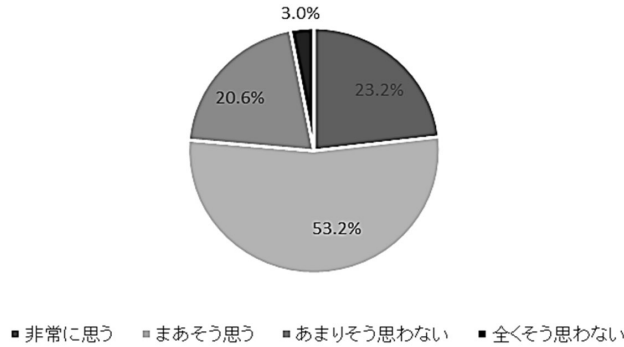
グラフ6-9 「兄弟数」からみた「商売を始めたい」



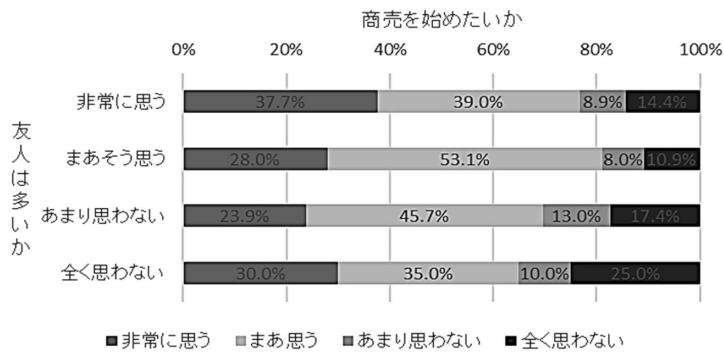
グラフ6-10 「兄弟数」からみた「商売を始めたい」



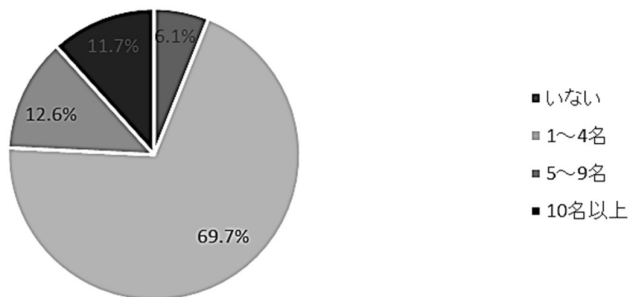
グラフ 6 - 11 「友人数」からみた「商売を始めたい」



グラフ 6 - 12 「友人数」からみた「商売を始めたい」

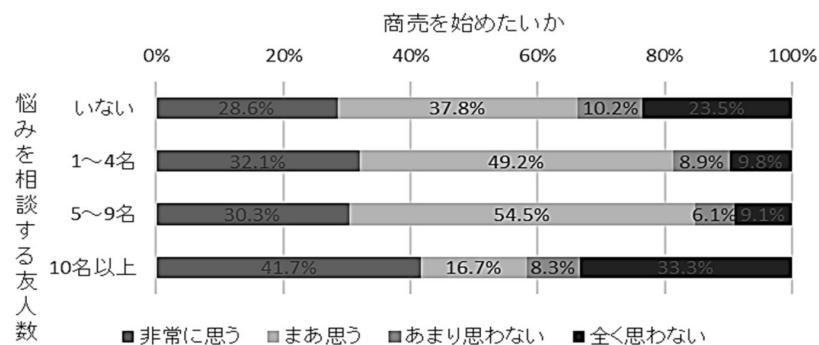


グラフ 6 - 13 「悩みを打ち明けられる友人は何人いるか」からみた「商売を始めたい」

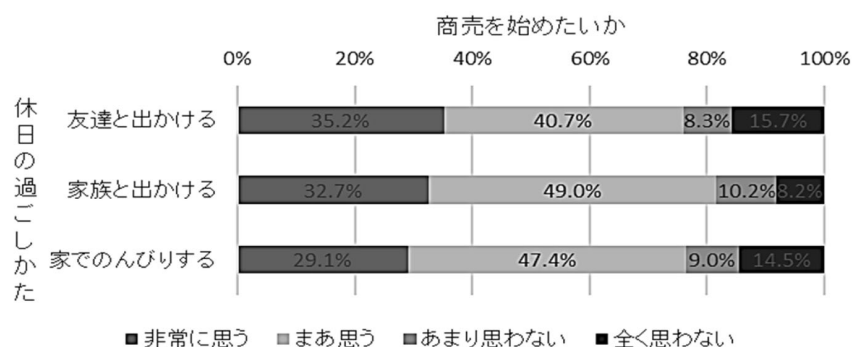


いることは非常に特徴的である。また、ここでは聞いていないが、親族等に相談をするかと問うたらどうなっていたらだろうか。あくまでも推測であるが、中国では多くの人が親身になって相談相手になってくれる地縁・血縁者がたくさんいるのではないと思われる。たとえば、(グラフ 6 - 15 参照) をみると、中国では、休日に家族と過ごしている人の割合がもっとも高くなっている。家族と過ごす時間のなかで、地縁・血縁者との触れ合いも盛んにおこなわれているのではないかと推測される。逆に、日本では (グラフ 6 - 16 参照), 「家族と過ごす」時間はそれほど多く

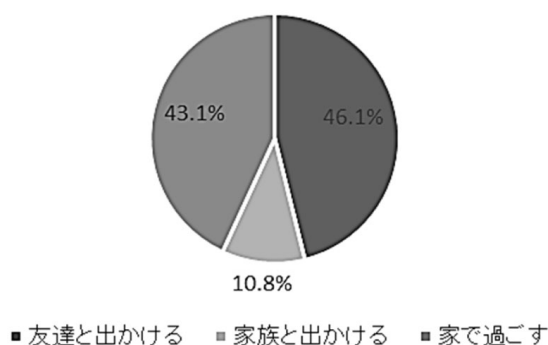
グラフ 6 - 14 「悩みを打ち明けられる友人は何人いるか」からみた「商売を始めたい」



グラフ 6 - 15 「休日の過ごし方」からみた「商売を始めたい」



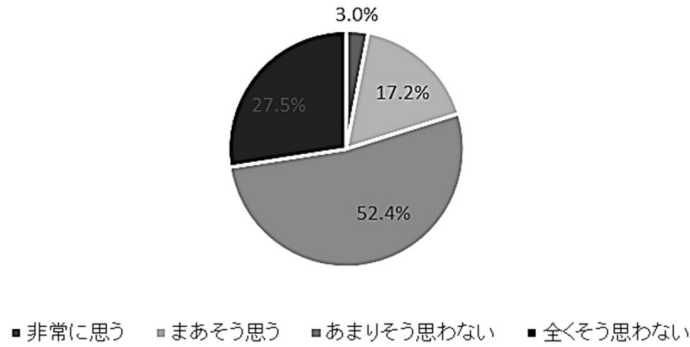
グラフ 6 - 16 「休日の過ごし方」からみた「商売を始めたい」



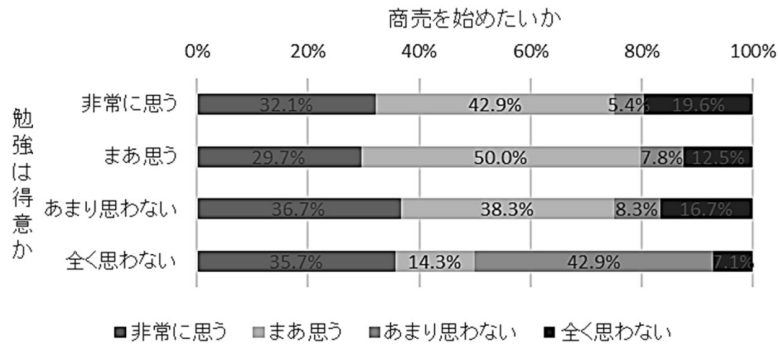
はなく、中国ほどの深い親族との関係はなく、商売を始めたいと考えていても地縁・血縁者からの助言を受けることは難しいのではないだろうか。

第5に、「勉強」と「商売を始めたい」の関連性をみれば、「あなたは勉強が得意ですか」という問いに対して、日本では（グラフ 6 - 17 参照），79.9%の人が「勉強が不得意だ」と答えている。ところが、中国では（グラフ 6 - 18 参照），商売を始めたい人のなかには、「勉強が不得意だ」

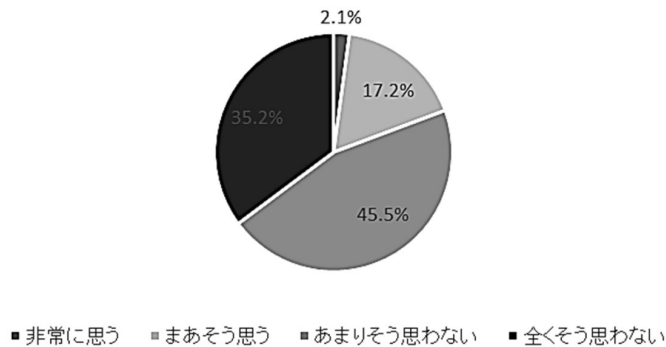
グラフ 6 - 17 「勉強は得意だと思うか」からみた「商売を始めたい」



グラフ 6 - 18 「勉強は得意か」からみた「商売を始めたい」



グラフ 6 - 19 「あまり勉強をしなくても将来は困らない」からみた「商売を始めたい」

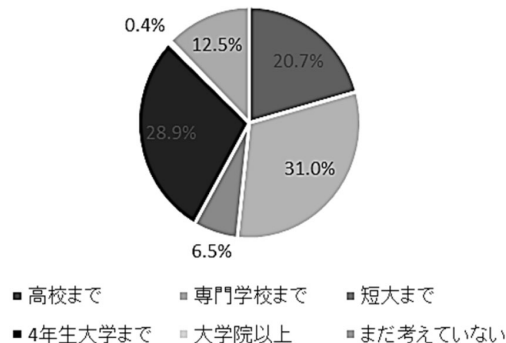


と答えている人の割合が一番低くなっている。日本の場合には、一般企業には勉強（学校での教育）が不得意だと入ることが難しく、そのため残された道として「商売を始めたい」と考えているのだろうか。また、日本では（グラフ 6 - 19 参照）、「あまり勉強をしなくても将来は困らない」と「商売を始めたい」の関連性をみれば、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」が併せて 80.7% もおり、「勉強は不得意である」が、「勉強はしなくては将来困る」と考えていること

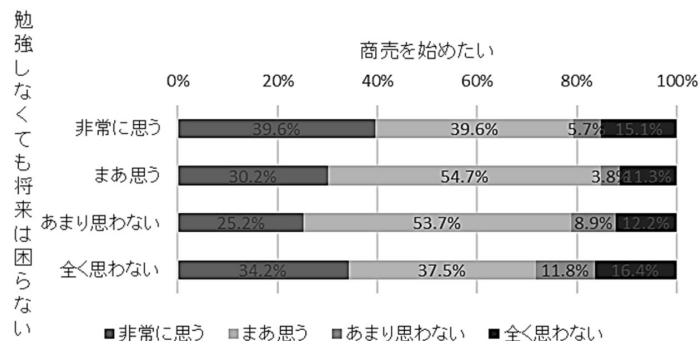
がわかる。さらに、「将来求める教育レベル」と「商売を始めたい」の関連性をみれば（グラフ 6 - 20 参照）、「四年生大学以上」を希望している人は3割しかおらず（大学院以上は最も少なく0.4%）。「勉強はしなくては困る」が、「勉強は苦手」であり、将来求める教育レベルもそれほどの高さが目指されているわけではないようだ。つまり、このような「勉強」を、彼らが学校での教育と捉えているのであれば、これら3つの勉強に関する回答をみると彼らが抱く劣等感が浮かび上がってくるようでもある。そして、上で述べたように「劣等感」の裏返しとして「商売を始めたい」と考えているように捉えられることができる。実際、高校の教壇に立っていると、「そんな問題、僕たちには無理だよ」、「できるわけがない」といったようなネガティブな発言がよく聞こえてくる。

中国では（グラフ 6 - 21 参照）、「商売を始めたい」とする回答者のうち、「将来勉強をしなくては困る」、「勉強をしなくても困らない」と答えている人の割合に差異はなく、あまり勉強と商売を始めることにして関連性はみられない。しかし、（グラフ 6 - 22 参照）からは、商売を始めたいと非常に思っている回答者のなかで、「大学院以上」を希望している人が6割以上を占めている。この点は、特筆すべき点ではないかと思われる。その理由としては、実際に、誰もが大学院に進学することは難しいかもしれないが、人間関係を少しでも広げていきたいという考え方

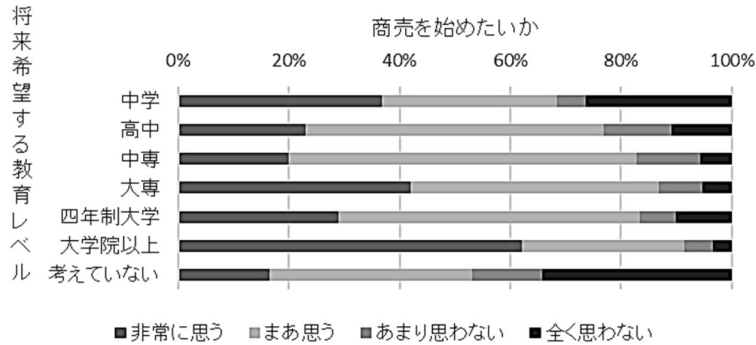
グラフ 6 - 20 「将来求める教育レベル」からみた「商売を始めたい」



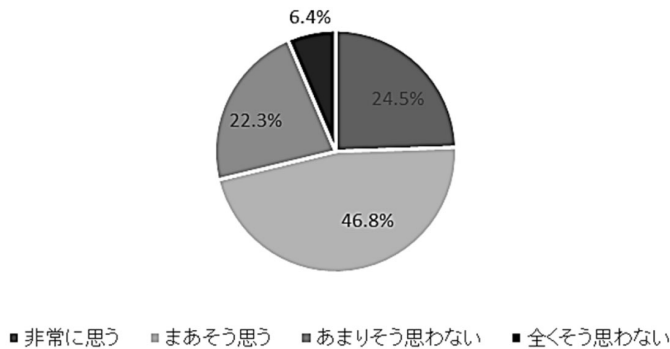
グラフ 6 - 21 「勉強しなくても将来は困らない」からみた「商売を始めたい」



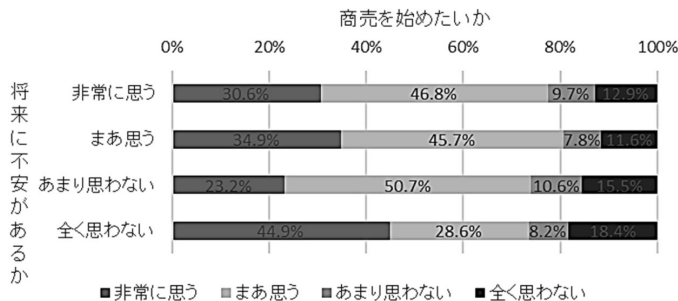
グラフ 6 - 22 「希望する教育レベル」からみた「商売を始めたい」



グラフ 6 - 23 「将来に関しての不安」からみた「商売を始めたい」



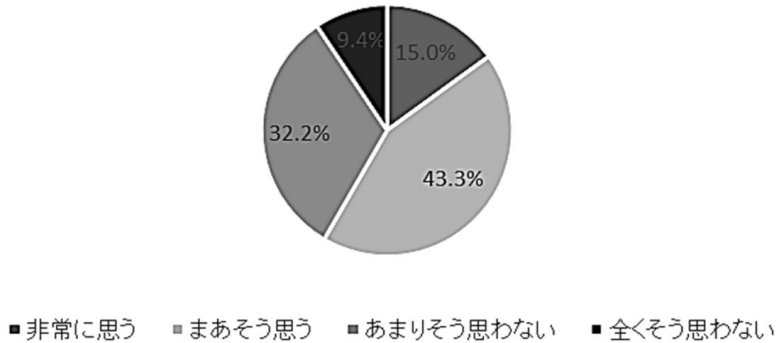
グラフ 6 - 24 「将来に関しての不安があるか」からみた「商売を始めたい」



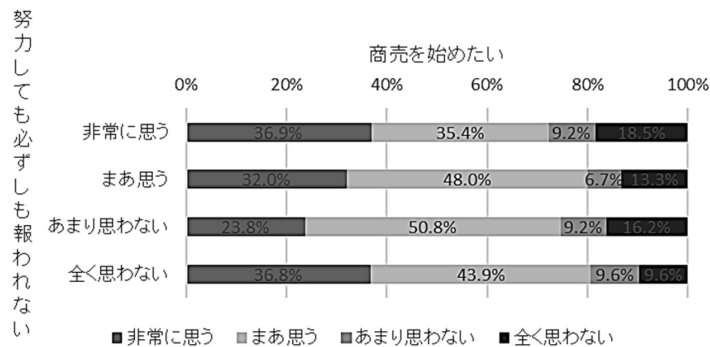
を強く反映した結果ではないだろうか。

第6に、「将来に関しての不安」と「商売を始めたい」の関連性をみれば、日本では（グラフ 6 - 23 参照），81.3%の人が将来に不安を感じている。しかし，中国では（グラフ 6 - 24 参照），逆に「商売を非常に始めたい」と考えている人の中には，「将来に不安が全くない」と44.9%の人が答えている。これは，「将来に不安がある」18.4%の割合よりも高くなっている。しかし，「努力しても必ずしも報われないと思うか」という問いに対しては（グラフ 6 - 25 参照とグラフ

グラフ 6 - 25 「努力しても必ずしも報われない」からみた「商売を始めたい」



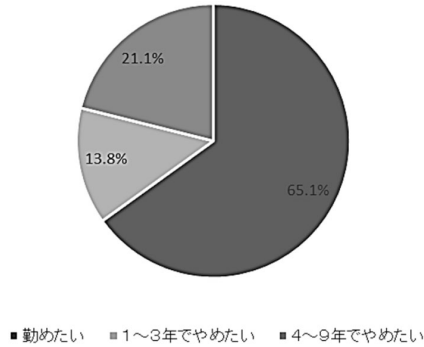
グラフ 6 - 26 「努力しても必ずしも報われない」からみた「商売を始めたい」



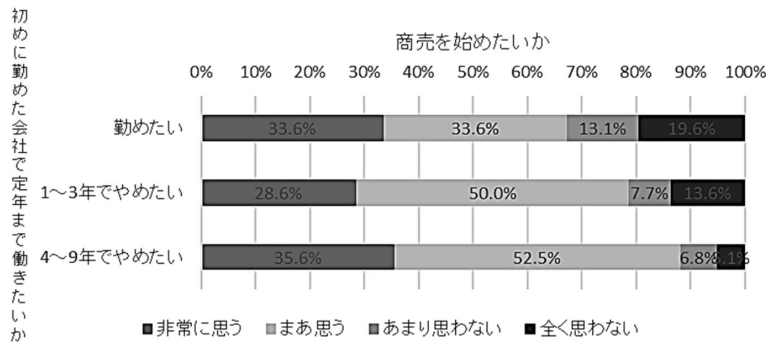
6 - 26 参照), 日本では, 「商売を始めたい」と答えている人の中では, 「努力は報われない」と答えている人が 58.3%と半数以上を占めている。中国では, 「商売を始めたい」と思っている人の中で, 「努力しても報われない」と答えている人が半数ずつであるが, 「努力しても全く報われない」と考えている層は日本と比べると中国は少なくなっている。これら 3 点からも, 日本の方が「商売を始めたい」とする回答者は, 一つの逃げ道として捉えているような, ネガティブさを反映した結果となっている。

第 7 に, 「就職」と「商売を始めたい」の関連性をみれば, 「一番初めに勤めた会社で定年まで働きたいですか」という問いに, 日本では (グラフ 6 - 27 参照), 「勤めたい」と答えた人が 65.1%と最も多い答えとなった。しかし, 中国では (グラフ 6 - 28 参照), 逆に, 「勤めたい」と答えた人の割合が一番低く, 「4~9 年でやめたい」と答えた人の割合が最も高くなっている。また, 「就職する上での不安がありますか」という問いの回答をみると, 日本では (グラフ 6 - 29 参照), 「不安」と答えている人の割合が 88.0%いる。中国では (グラフ 6 - 30 参照), 「不安が全くない」という割合が比較的 low, 少なくとも日本より不安に感じている人はいない。このような結果から明らかなように, 両国を比べると, 日本のそれに整合性を見出すことは難しいといえる。そもそも, 商売をいつか始めたいと考えているのであれば, 一番初めに勤めた会社で定年まで働

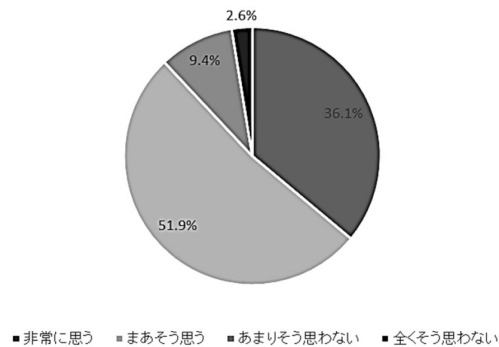
グラフ 6 - 27 「一番最初に勤めた会社で定年まで働きたいか」からみた「商売を始めたい」



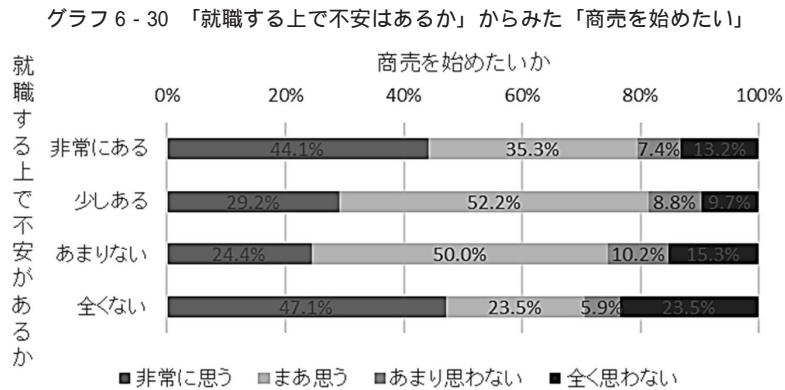
グラフ 6 - 28 「一番最初に勤めた会社で定年まで働きたいか」からみた「商売を始めたい」



グラフ 6 - 29 「就職する上で不安はあるか」からみた「商売を始めたい」



きたいと考えている人の割合は小さくなるはずであるし、就職に関する不安も商売をいつか始めるのであれば、そこまでも意気込むことはないのではないだろうか。そのため、日本の高校生が答えた「商売を始めたい」というのは、自分の学力への自信のなさ、ネガティブさの表れでもあり、それほど現実味を帯びた回答には思えない。もちろん、日本のアンケート対象者の方が年齢は少し高いことも関係はしているのであろうが、なおさら「商売を始めたい」と考えているのは、



「無理だろうが、できるならばしたい」というような気持ちが見え隠れしているのではなかろうか。

おわりに

筆者は、高校の授業で、友誼学校の写真や動画をみせながら、農民工の子どもたちの話をすることがある。校庭を走り回る姿、屈託のない笑顔でカメラに近づく子どもたち、授業風景などを紹介する。いつもと違う授業に興味を示し真剣なまなざしで話を聞いているのだが、高校生が「元気いっぱいですね」とか「楽しそうですね」というような感想を抱くことはない。ただ、彼らは誰もが「かわいそうだ」と口をそろえる。どこがかわいそうなのかと聞くと、校庭や教室が汚い、エアコンがない学校なんて信じられないからだという。どこを見ているのだと、思わず声をあげたくなるが、その程度の感想しか思いつかないのだ。もちろん、これはこの高校に限った問題ではなく、日本の教育現場ではありふれた風景であろう。それは小学校から受けてきた教育が大きく影響した結果だと思わざるを得ない。

本論で紹介したように、日本の高校生の実態とは、友人もあまりいない、勉強にも苦手意識をもち、希望を持ちにくい、努力しても報われないと感じている。ネガティブな結果を並べる彼らの方が、「かわいそう」な存在でもある。その上、理不尽な校則²³のもとで学校生活を送ることを余儀なくされている彼らの姿は、「かわいそう」を通り越しまさに哀れにも映る。上述したように学校のレベルがそのまま、彼らのその後の人生を大きく規定しているようでもある。日本社会は、知識・技術が少なく、人間関係を築く能力が低く、ただ従順だけを求めているのだろうか。筆者の教え子たちが、今後、どのように生きていくのか、心配以外のなにものでもない。

23 生江明, 川村潤子, 原田忠直 (2018)【鼎談】続鼎談「蜷川幸雄のメモから読み解く現代社会 仮面とお面の間に存在するもの」『日本福祉大学経済論集』第 57 号, pp.137-168 (日本福祉大学経済学会)。

ただし、本論では、このような日本の高校生の姿と比較しつつ、中国社会の最底辺を形成しているといわれる農民工の子どもたちの実態を少なからず浮かび上がらせることができたのではないだろうか。自分たちは勉強が得意だと考えている割合も多く、親族との交流も深い。そしてあまり将来や就職に関しても不安を感じておらず、努力はいつか報われると答える彼らは実にポジティブである。そのように彼らがポジティブに考えることができるのは、そう思わせてくれる社会が背後にあるのではないだろうか。これは、私の一つの仮説であり、さらにいえば、「学校教育」の意義についての再考を促すための一つの指針でもある。

とくに、「商売」に関していえば、日本の場合、あまり商売をしている人を目にするものもなく、サラリーマンの両親や大人たちをみて日々通学しているのであろう。それゆえ、なかなか「商売」というものがどのようなものなのか描くことが難しいだろう。サラリーマン以外の生き方を見出せないことに、不安や暗さがアンケート結果にも出てきているのではないだろうか。それに対して、友誼学校の子どもたちは、上で述べたように「商売」をしている親戚や知人たちに囲まれて生きているといっても過言ではない。たとえば、友誼学校の親たちのなかには、昼ドラドラと家で過ごしている大人たちも少なくない。昼間からお酒を飲んでいるケースもある。ところが、彼らは、夜になると繁華街で屋台を出して生き生きと働いている。実際、海寧市の繁華街の屋台で友誼学校の校長や教員たちと食事をしていると、友誼学校に子どもを通わせる親たちから声を掛けられることもしばしばある。そんな大人たちを、残念ながらなかなか日本では目にすることはない。そのような多くの仕事が存在している中国と比べれば、やはり日本社会は均一的でもあるようにも映る。そして、日本の子どもたちは、目にしている大人たちのようになれるのか、ましてや、なりたくもない姿であったとしても、その選択肢は決して多くはないであろう。そのため、日本の子どもたちが連想する「勉強」とは学校の中で学ぶことに限定されてしまい、中国のように「社会で学ぶ」ことを連想することができないのではないだろうか。逆に、農民工の子どもたちの周りには、生きていくためのヒントがたくさん落ちていくということであろう。言い換えれば、知識や技術を習得する機会に満ち溢れ、手本となる大人たちが存在している。もちろん、そのような機会のなかで、子どもたち自身にどの程度の知識や技術が蓄積されていくことになるのかは定かではないし、この点を解明しなければ、彼らの実態に迫ったとはいえず、「農民工（子どもを含め）＝社会的弱者、低賃金層」という構図を論破したとはいえない。それゆえ、この問題については、今後、友誼学校の卒業生に対する追跡調査を実施し、その実態を明らかにしていきたい。

参考文献

- A.R.ホックシールド (2000) 『管理される心 感情が商品になるとき』世界思想社。
 汪希望 (2012) 「中国民工学校外史 現役校長が語る民工学校の過去・現在・未来」(『現代と文化』(監修 修原田忠直, 生江明。第 125 号。日本福祉大学福祉社会開発研究所)。
 加藤弘之 (2016) 『中国経済学入門 「曖昧な制度」はいかに機能しているか』名古屋大

学出版会)

川村潤子・原田忠直「NPO 法人マザーズライフサポーターの痛みな歩みが意味するもの 母たちは、停滞する既存の社会制度を尻目に、自分たちの望む社会を作り始めた」マザーズライフサポーター」(『日本福祉大学経済論集』(第 57 号) pp.59-81 日本福祉大学経済学会 2018).

厳善平 (2008)「中国における「三農政策」とその転換」『現代アジア研究 3 政策』慶応義塾大学出版会. pp.231-252.

厳善平 (2009a)『農村から都市へ - 1 億 3000 万人の農民大移動』岩波書店.

厳善平 (2009b)「農民工の就業と権利保障 2008 年珠江デルタ 9 市農民工アンケート調査に基づく」『大原社会問題研究所雑誌』No.614.

厳善平 (2010)『中国農民工の調査研究 上海市・珠江デルタにおける農民工の就業・賃金・暮らし』晃洋書房.

厳善平・湯浅健司・本経済研究センター編 (2016)『2020 年に挑む中国 超大国のゆくえ』文眞堂.

厳善平 (2014)「中国における戸籍制度改革と農民工の市民化 上海市の事例分析を中心に」『東亜』No. 563. pp.76-86.

玄田有史 (2010)『希望のつくり方』岩波新書.

新保敦子・阿古智子 (2016)『超大国・中国のゆくえ 勃興する「民」』東京大学出版会.

中村圭 (2019)『なぜ中国企業は人材の流出をプラスに変えられるのか』勁草書房.

生江明, 川村潤子, 原田忠直 (2018)【鼎談】続鼎談「蜷川幸雄のメモから読み解く現代社会 仮面とお面の間に存在するもの」『日本福祉大学経済論集』第 57 号, pp.137-168 (日本福祉大学経済学会).

原田忠直 (2010a)「中国・民工第 2 世代 (中学生・高校生) の現状認識と将来展望」日本福祉大学研究紀要『現代と文化』第 121 号.

原田忠直 (2010b)「民工と自由」『日本福祉大学 経済論集』第 41 号. 日本福祉大学経済学会.

原田忠直 (2012)「中国・高校生の「希望」と学力差の関係性について - 江西省 T 市及び Y 県の高校生に対するアンケート調査結果より -」『日本福祉大学経済論集』第 44 号日本福祉大学経済学会.

原田忠直 (2013)「民工 (男性) の「希望」とその実現性について - 浙江省 H 市における民工に対するアンケート調査結果を中心に -」『日本福祉大学経済論集』第 46 号日本福祉大学経済学会.

三浦有史 (2013)「中国不平等社会の持続性 かみ合わないパズルをどう組み合わせるか」渡辺利夫 + 21 世紀政策研究所監修, 大橋英夫編『ステート・キャピタリズムとしての中国 市場か政府か』勁草書房.

三浦有史 (2014)「中国「城鎮化」の実現可能性を検証する」『JTI レビュー』Vol.3. No13. pp.41-66.

三浦有史 (2015)「都市化政策と戸籍制度改革は中国経済を救うかー着地点のみえない改革の行方」『JTI レビュー』Vol.4. No.23. pp.85-105.